

平成29年度

日本文化特別演習 報告書



第7号

平成29年度

日本文化特別演習 報告書

第7号



月桂冠旧本社（大正8年築）前にて

北海学園大学人文学部

第2日 2月27日
[団体研修]

伏見巡見



御香宮神社にて 講師の大西秀之先生



寺田屋にて、蟬塚さんと田中(杏)さん



寺田屋の石碑の隣で、山田さん



御香宮神社にて



寺田屋前にて大西先生の解説を拝聴



伏見の酒蔵を巡見



月桂冠大倉記念館に到着



月桂冠大倉記念館にて、田中(杏)さん



月桂冠大倉記念館にて



月桂冠旧本社前にて 集合



「鳥せい」前



「鳥せい」にて 左端は添乗員の鈴木すみれ氏



三栖閘門にて



大西さん、畑内さん



青山さん、伊藤さん、田中(尊)さん



道野さん、蟬塚さん、山田さん、田中(杏)さん、小野瀬さん



長田さん、古川さん、藤林さん



鈴木さん、武田さん



濠川土手・月桂冠昭和蔵を背景に

第3～5日

2月28日～3月2日

[個人研修]



伏見の狐



「祇園小石」にて



あまざけ屋 末富亭(伏見稲荷山)



思い出の1枚



東山慈照寺の観音殿



下鴨神社



Dancing in 千本鳥居



哲学の道



千利休の使った井戸が描かれた茶碗



建仁寺の双龍図



三十三間堂にて



伏見稲荷大社



八坂神社の牛



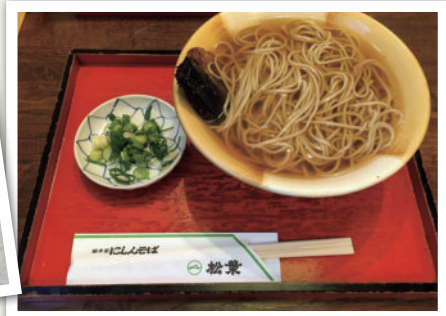
「司津屋」の玉子丼



夜の先斗町



平安神宮にて



京都 総本家にしんそば・松葉



山頂を目指して in 伏見稲荷大社



路地にて



住吉神社の兎



焼き鳥居酒屋ろく



人生二度目の清水寺！



なかよし



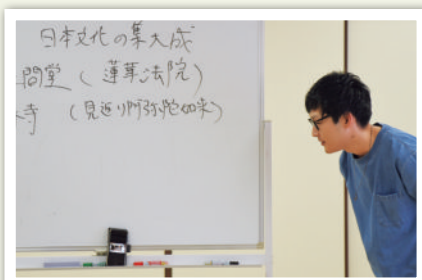
鞍馬山の木の根道



おばんざい「花かがみ」

第6日 3月3日

研究発表会



古川さん



青山さん



田中(杏)さん



道野さん



畑内さん



伊藤さん



小野瀬さん



山田さん



長田さん「京都、最高！」



大西さん



武田さん



田中(尊)さん



藤林さん



熱心に発表に聞き入る



京都最後の食事

目 次

平成29年度 日本文化特別演習 報告

引率教員 手塚 薫 郡司 淳	1
古都の史跡を巡って	大西 裕貴 3
森見登美彦文学の世界を歩く	小野瀬 恵 5
京都のSNS映えスポット	鈴木 佳穂 9
稲荷から見たキツネについて	蟬塚 咲衣 13
疲れた体に神々のパワーを	武田 茉里 15
「茶」をめぐる京都たび	田中 杏奈 17
“伝統”を守る都市	道野由樹子 19
世界遺産を知る旅	山田夏菜子 23
京都・大阪のパワースポットを巡る	長田 亮太 25
東山慈照寺の散策	藤林 幹生 27
日本文化の集大成	古川 仁貴 29
京のかわいい神使たち	青山 裕香 31
伏見と酒、伏見の酒	伊藤 大樹 33
人に力を与える都	田中 尊理 35
京都人の人となり	畑内 京介 37

平成29年度 日本文化特別演習 報告

引率教員 手塚 薫 郡司 淳

日本文化特別演習は、平成26年度の新カリキュラム施行に際して、英米文化学科の学生にも門戸を開きつつ、従来の日本文化演習にかわって新たに開講されたもので、今年度で4年目を迎えました。京都・奈良を中心とする関西地方での実地研修は、授業として開講する前の研修旅行を除き旧演習から数えても実に16回目にあたり、人文学部の年中行事としてすっかり定着した感があります。

今年度の演習は、9月から1月にかけて実施された3回の事前ガイダンス（いずれも土曜日に開講）をふまえ、2月26日（月）から3月3日（土）の5泊6日の日程でフィールドワーク（団体・自主研修）と研究発表を行いました。

履修者は、いずれも日本文化学科の学生で、1部2年生が8人、同4年生が3人、2部2年生が3人、同3年生が1人の合計15人で、次の諸氏です。

青山裕香 伊藤大樹 大西裕貴 小野瀬恵 鈴木佳穂 蟬塚咲衣 武田茉里 田中杏奈
田中尊理 長田亮太 畑内京介 藤林幹生 古川仁貴 道野由樹子 山田夏菜子

昨年度の履修者が48人であったことを思うと、いささかさびしい人数ですが、それだけにまとまりも良く、いずれの受講生も真面目に授業に取り組みました。学生諸氏が自らを律し、行動してくれたお陰で、全期間を通じてトラブルもなく、無事に研修を終えることができました。

さて、事前ガイダンスでは、旅行に必要な諸連絡や手続きを行いつつ、受講生各人が自らの研究課題を設定し、個人研修で訪問する予定の場所について参考文献などを基に事前調査を行い、レポートとして提出したほか、聞き取り調査の予行練習としてDVD『京都—千年の水脈 たたえる都』NHKスペシャル・アジア古都物語第6集（NHKエンタープライズ、2003年）を視聴し、その内容をレポートにまとめる作業を行いました。

京都における具体的な研修日程は次のとおりです。

- 第1日 移動（新千歳空港—関西空港—京都）
- 第2日 団体研修（伏見巡見）
- 第3日 個人研修
- 第4日 個人研修
- 第5日 個人研修
- 第6日 研究発表・移動（伊丹空港—新千歳空港）・解散

このうち、第2日の団体研修では、晴天のなか午前9時にホテルを出発し、今出川駅（市営地下鉄今出川線）から桃山御陵前駅（近畿日本鉄道）へ移動。同志社女子大学現代社会学部教授である大西秀之先生（ご専門は人類学・環境学）と合流し、先生のご案内で、鳥羽・伏見の戦いで薩摩軍が陣をしいた御香宮神社を視察したのち、伏見の商業都市としての機能を物語る「伏見銀座」跡が残る大手筋商店街を歩きました。さらに龍馬通りを経て龍馬が襲撃された寺田屋（再建）に至り、しばし見学。伏見の酒造を紹介する月桂冠大倉記念館を見学したのち、隣接する「鳥せい」本店で昼食・休憩をとりました。

その後、十石・三十石船水郷（桜のシーズンに備えて水を抜き河床の土砂を浚渫中）沿いに南下し、伏見みなと広場の展望スポットから宇治川を眺望し、すぐそばの三栖閘門資料館を見学。館員の解説によれば、三栖閘門は大正大洪水をきっかけに建設された施設であり、船の通航だけでなく治水施設（堤防）としても現在なお重要な役割を担っているとのこと。宇治川の一支流濠川に面する月桂冠昭和蔵を背景に記念写真を撮影後、もう一つの大手酒造会社が運営する黄桜記念館・河童資料館を見学し、15時頃に研修を終了しました。

第3日から第5日にかけては、個人研修が行われ、その成果をふまえ、最終日にあたる第6日には、9時から正午までの3時間、学生諸氏による研究発表会が開催されました。時間の関係上、1人あたり10分弱の報告に過ぎませんでしたが、事前に用意したレジュメなどを基に、いずれも充実した内容の報告が行われました。ホテルの会場で昼食をとったのち、帰途につき、新千歳空港に定刻の17時10分に到着、思い出深い旅程を終え、解散しました。

日本文化特別演習は、「日本文化の母体である関西地方にて5泊6日の研修旅行を行い、「歩く、見る、聞く」学習を通して、日本文化についての理解を深める」ことを授業のテーマに掲げています。学生諸氏は、それぞれが自らの問題関心と事前の課題設定にしたがい、この「歩く、見る、聞く」主体的な学びをとおして得た知見をレポートにまとめています。それぞれのレポートは、初学者ゆえの拙さも残るとはいえ、知的好奇心に満ち、「文化」の具体的な「すがた・かたち」を発見した喜びが率直に綴られています。まさに本報告書は、このような受講生各人の研鑽の成果として誇るに足るものと自負しています。人文学部の教職員・学生をはじめ、多くの皆さんにご高覧賜りますれば、幸いです。

最後になりましたが、ご多忙のなか、第2日の団体研修で講師を務めていただいた大西先生と、今回の研修旅行をコーディネートし、旅行中も添乗員としていろいろと心を砕いてくださった日本旅行北海道札幌支店の鈴木すみれ氏に対し、この場を借りて厚く御礼申し上げます。ちなみに鈴木氏は、昨年3月に北海学園大学経済学部1部経済学科を卒業された方で、学生諸氏にとっては先輩にあたります。人文学部では将来、観光・旅行業に志望する学生も多いことから、身近な存在を通してその責任の重さと業務の一端をうかがい知ることができ、良い勉強の機会になったと思います。

古都の史跡を巡って

1 部 日本文化学科 2 年 2716125 大西 裕貴

今回、私は 3 日間の自主研修の中で京都内の様々な史跡を巡ることができた。今回の研修で、私は敢えて時代を細かく設定せず、様々な時代に登場した寺社や城が日本の古都である京都とどのような形で関わり、今日までの日本史を形成してきたのかを学ぶことを目的としてフィールドワークを行った。その結果得られたものをまとめていきたい。

1 日目は御所周辺を中心に散策した。特に、京都御所はかつて天皇家が居住していた場所であり、天皇家と京都の歴史に深く関わる史跡であったために、今回の研修で最も着目していた。まず、京都駅からバスを乗り換えて下鴨神社へと向かった。京都はバスの乗り換えが中々複雑であり、事前に調べたにも関わらず迷ってしまったが、それでも辿り着くことができた。下鴨神社は上賀茂神社と共に天皇家から崇敬されていた由緒ある神社であり、京都きっての古社である。私がここを訪れて驚いたのは、日本の国歌『君が代』にもある「さざれ石」がこの下鴨神社に祀られていたことである。調べてみると、さざれ石があるのは下鴨神社だけではないようだが、国歌で歌われる存在をこの目で見ることができたのは良い経験だった。次に向かったのが、京都御苑内にあるかつての皇居、京都御所である。1392 年の南北朝統一から 1869 年の明治天皇による東京行幸まで使用されたこの建物は、今はもう天皇家が住んでいない観光名所となっているが、それでもかつてここに天皇が住んでいたのだと思うと感慨深いものがあつた。その次に向かったのが二条城である。二条城は 1601 年に徳川家康が上洛時の宿舎とする目的で築城を命じた城であり、1603 年に二の丸の部分が完成した。現在の規模となったのは 1626 年、後水尾天皇の行幸に合わせて改築したことによる。この二条城の天守には後水尾天皇が登っており、日本で唯一天皇が登った天守だったとされているが、残念ながら現存しておらず、今はその跡が残るのみである。天守跡を登ってみると、京都の町の風景を見渡すことができた。まだ天守があつた時代ならば、将軍や天皇が見た城下の風景はさぞ美しいものだっただろう。この日、最後に行ったのが神泉苑である。神泉苑は元々平安京遷都とほぼ同時期に大内裏に隣接して造営された禁苑(天皇のための庭園)であり、今もその美しい景観が保たれている。ここには善女龍王という龍神が祀られており、空海の雨乞い伝説が残されている。パワースポットとしても有名な場所であるが、私はここで思わぬ生き物と遭遇した。私が善女龍王に手を合わせていると、いつの間にか足下にアヒルがいたのである。数えてみると 3 羽いたのだが、どうやら神泉苑に住んでいるらしい。このアヒル達の存在も、人々がここを訪れるきっかけになっているのかもしれない。

2 日目は京都駅から奈良線に乗って宇治駅で降り、平等院鳳凰堂へと向かった。10 円玉の裏側に描かれていることで有名な鳳凰堂は、拝観料とは別に 300 円を払うことで内部の拝観が可能であり、私は運良く入ってすぐに内部拝観が始まる時間だった。平安時代のま

まである鳳凰堂の内部には阿弥陀如来坐像が祀られており、これも平安当時の頃から現在まで残っているのだという。敷地内に存在する鳳翔館ミュージアムでは梵鐘や鳳凰一対など、平安時代からの宝物を目にすることができ、歴史の重みを感じることができた。平等院を後にして京都駅へ戻ってからはバスで祇園方面へ向かい、三十三間堂を拝観した。ここには1001体の千手観音立像があり、自分と似た顔がある、または自分の会いたい人の顔があるとも言われているが、私はどちらも見つけることはできなかった。奥の方にある立像は顔が全く見えなかったもので、もしかすると奥の方にあったのかもしれない。その後は清水寺に向かった。清水寺には高校の修学旅行で一度行ったことがあったのだが、今回は「随求堂胎内めぐり」という体験ができた。これは大随求菩薩のお腹の部分へ入り、その中にある光る石に手を添えて願い事をするというものなのだが、予想以上に内部は暗く、石を見つけたときには安心して肩の力が緩むのを感じた。その日の最後には八坂神社にも参詣した。ここは元々行く予定は無かったのだが、バスを間違えて慌てて降りた結果、偶々この八坂神社の前に来たという不思議な巡り合わせであった。目に見えぬ何かによってここへ導かれたというのは流石に考えすぎだろうか。

3日目は京都駅から稲荷駅まで向かい、伏見稲荷大社に行った。ここも修学旅行で訪れたことのある場所だったが、かつてと変わらぬ静かで神聖な雰囲気を漂わせており、とても居心地が良かった。この伏見稲荷大社も京都有数の古社であり、時折朽ちている鳥居を見ると改めて歴史の長さをしみじみと感じた。その後は京都駅へ戻り、徒歩で東寺へ向かった。東寺と伏見稲荷大社には深い関わりがあり、827年、空海が稲荷神に東寺の鎮守神となってもらうために直々に伏見稲荷大社へ参詣したとされている。それ以来行われる「稲荷祭」では神輿が必ず東寺へと向かい、東寺の僧から御供と読経を受けるのだという。また、この東寺では期間限定で五重塔の初層内部を見ることができ、丁度その時期に訪れることができた。拝むことができた仏像は普段は見ることができないものなので、しっかりとその姿を目に焼き付けてきた。最後に、私は北野天満宮へと向かった。ここには撫で牛と呼ばれる、頭を撫でると頭が良くなるという像が奉納されており、一人の学生として思う存分撫でてきた。後は自分自身の努力次第であろう。そして、3日間の自主研修を終えた。

こうして私は様々な史跡を巡ることができた。これらの史跡は造営された時代も違えば、その時代によって果たした役割も違う。京都御所や神泉苑のように天皇家ゆかりの場所もあれば、東寺や伏見稲荷大社のように真言宗ゆかりの場所もある。だが、これらの全てが古都としての京都を形作り、現代においても日本史に影響を及ぼす重要な史跡としてかつての京都の姿や、そこに存在した日本文化を伝えてくれている。時代や役割は違えども、その点においてはどの史跡も同じだと思う。そして、地元の人々の努力によって古き街並みと歴史ある建物がこうして現代に残されているのだということも忘れてはならない。日本文化を学ぶ学生としては、後の時代に歴史を継承しようとする活動に感謝すると共に、古都であったからこそ得られた今回の経験を今後の課題に生かし、改めて日本文化を見つめ直していきたいと思っている。

森見登美彦文学の世界を歩く

1 部日本文化学科 2 年 2716132 小野瀬 恵

はじめに

自主研修を行うにあたり、私が設定したテーマは「森見登美彦文学の世界を歩く」である。森見さんは奈良県生駒市出身の小説家で、京都大学農学部生物機能科学科応用生命科学コースを卒業後、同大学院にて農学研究科修士課程修了している。大学時代を京都で過ごした経験から、小説では「京都」を舞台にした物語が多く、また、「男子大学生」を主人公にすることが多い。今回は、数ある森見登美彦作品の中から、2017 年 1 月 9 日より放送されたアニメ「有頂天家族 2」、2017 年 4 月 7 日より公開された劇場版アニメ「夜は短し歩けよ乙女」の、最近映像化された 2 作品に注目して“聖地巡礼”を行い、作品にもっと触れてみたいと考えた。始めに、簡単な 2 作品のあらすじ紹介をさせて頂く。

「面白いことは良きことなり！」が口癖の矢三郎は、狸の名門・下鴨家の三男。宿敵・夷川家が幅を利かせる京都の街を、一族の誇りをかけて駆け巡る。が、家族はみんなへなちょこで、ライバル狸は底意地悪く、矢三郎が慕う天狗は落ちぶれて人間の美女にうつつをぬかす。世紀の大騒動をふわふわの愛で包む、傑作・毛玉ファンタジー！
(『有頂天家族』2007 年、幻冬舎、裏表紙あらすじ)

「黒髪の乙女」にひそかに想いを寄せる「先輩」は、夜の先斗町に、下鴨神社の古本市に、大学の学園祭に、彼女の姿を追い求めた。けれど先輩の想いに気付かない彼女は、頻発する“偶然の出会い”にも「奇遇ですねえ！」と言うばかり。そんな 2 人を待ち受けるのは、個性溢れる曲者たちと珍事件の数々だった。キュートでポップな恋愛ファンタジーの傑作！

(『夜は短し歩けよ乙女』2008 年、角川文庫、裏表紙あらすじ)

2 月 28 日 (水)

まず自主研修 1 日目に訪れた場所は、「頂法寺六角堂 へそ石」「寺町通商店街」「三嶋亭」「山とみ」「東華菜館」「200yen bar moon walk 四条木屋町店」「六道珍皇寺」である。最初に訪れた頂法寺六角堂のへそ石とは、桓武天皇の延暦 12 年長岡京より平安京へ遷都の時、六角堂の所在が道路の中央に当たったため天皇が遷座を祈願されたところ御堂が自ら 5 丈 (約 15m) ばかり北へ退いた。その際に取り残された磁石であると伝えられ、六角堂が下京の町衆の寄合の場でもあり場所も京都の中心に当たることから「へそ石」や「要石」と呼ばれている。『有頂天家族』では、このへそ石は狸が化けたものとしており、「偽へそ

石様」と呼んでいる。下鴨家の長男・矢一郎と夷川家の早雲が狸界の長「偽右衛門」に立候補したことを偽へそ石様に報告しに行く、という場面で登場し、また、主人公・矢三郎は、子狸の頃に偽へそ石様を煙で燻すというイタズラをして、四半世紀あんなに叱られた子狸は例がなかった、と言われる程の大目玉を食らった場所でもある。実際に訪れてみると、原作にも「烏丸通のオフィス街から六角通を折れてすぐ」と表現されていたが、車通り・人通りの多い大きな道を一本曲がった所にあり、ここで沢山の狸が集まり偽右衛門の報告会を行っていたのだと感じ、驚いた。

次に訪れたのは寺町通商店街、三嶋亭、山とみである。この3か所は「有頂天家族」より登場する。寺町通商店街を入った先に三嶋亭というすき焼き屋があり、寺町通商店街を出て鴨川沿いに歩いていくと、山とみという小料理屋が見える。つまり徒歩圏内にある。特に山とみは、夏場は川床でも食事が食べられるのだが、矢三郎が師匠の天狗・赤玉先生に、赤玉先生が恋する人間・弁天に恋文を届けるお使いを頼まれ、弁天を探しに行くと、忘年会に狸鍋を食らう狸の天敵「金曜倶楽部」の会合を行っていた（弁天も金曜倶楽部の会員である。）、という場面で登場する。実際に訪れて感じたことは、面白いことに目がない矢三郎は頼まれた恋文を鴨川の向こう岸から矢文で届けようとするのだが、矢三郎が矢を放ったとされる場所には、シダレザクラ並木と腰の位置くらいの高さの街路樹が生えていた。自主研修時期は枯れ木になっていたが、原作の時期は夏であるため、葉が生い茂り、身体を隠すことが出来たのだなと思った。

次に訪れたのは東華菜館と200yen bar moon walk 四条木屋町店である。この2か所は『夜は短し歩けよ乙女』より登場する。東華菜館は、大学のクラブのOBが結婚することになり、内輪でのお祝いを開いた場所として登場する。店の名前は出てこないのだが、「市場木屋町の交差点から高瀬川を下った暗い街中に、木造三階建の古風な西洋料理店があって、高瀬川沿いの並木に温かい光を投げている」という表現が原作でされており、この表現から東華菜館ではないかとされている。ここから物語は始まり、このお祝いに先輩と黒髪の乙女は参加していた。200yen bar moon walk 四条木屋町店は、お酒が大好きな黒髪の乙女が先輩ばかりの席では好きなようにお酒を飲むというわけにはいかず、東華菜館で行われた1次会の後、2次会は失礼して、四条木屋町界隈を1人で練り歩こうとした際に最初に寄った場所である。原作では「bar 月面歩行」の名で登場する。実際訪れてみると、東華菜館は西洋料理店ではなく中華料理店であった。また、東華菜館から道路を挟んで目の前に「先斗町」と書かれた看板があり、細い路地を進んでいくと200yen bar moon walk 四条木屋町店があることが分かった。

最後に訪れた場所は六道珍皇寺である。六道珍皇寺は「有頂天家族」より登場する。ある事件をきっかけに下鴨家の次男・矢二郎が狸であることを辞め、蛙に化けてから元に戻れなくなり、建仁寺の南側にある六道珍皇寺境内の古井戸へもぐりこみ、隠居生活を送っている場所として登場する。時折、矢三郎はこの場所を訪れて、世間話や相談をしに行くシーンが原作にもアニメにもあるのだが、実際に訪れて感じたことは、下鴨家は下鴨神社・

糺の森に暮らしている為、下鴨神社から近いところにあると思っていたが、矢三郎はわざわざ矢二郎の様子を見るために訪れていたということが分かった。

3月1日（木）

自主研修2日目に訪れた場所は、「京都大学」「進々堂 京大北門前」「阿闍梨餅本舗 京菓子司 満月 本店」「下鴨神社（賀茂御祖神社）」である。

最初に訪れた場所、京都大学と進々堂 京大北門前は『夜は短し歩けよ乙女』より登場する。『夜は短し歩けよ乙女』では登場人物の殆どが大学生なのだが、原作・劇場版アニメともに何処の大学かは明確に述べられていない。しかし実際に訪れてみて、物語の最後に先輩と黒髪の乙女が待ち合わせをする進々堂 京大北門前は、店名の通り、京都大学の北門の目の前にあったことから、森見さんの出身大学である京都大学だと思った。

次に訪れたのは、阿闍梨餅本舗 京菓子司 満月 本店である。阿闍梨餅本舗 京菓子司 満月 本店も『夜は短し歩けよ乙女』より登場。劇場版アニメで黒髪の乙女が 200yen bar moon walk 四条木屋町店で出会った樋口という男に「途中で阿闍梨餅を買ってゆくといい。あれは出来立てがうまいからな」と言われて下鴨神社から京都大学に向かう途中、阿闍梨餅を購入し食べるというシーンで出てくる。調べてみると、出来立ての阿闍梨餅を食べることが出来るのは、本店だけであり、実際に訪れてみると、下鴨神社や京都大学とも近い場所にあることが分かった。

最後に訪れたのは下鴨神社である。下鴨神社は『有頂天家族』『夜は短し歩けよ乙女』の2作品で登場する。下鴨神社・糺ノ森は、下鴨家一家が暮らしている場所で、また、『夜は短し歩けよ乙女』では、黒髪の乙女が欲しがった『ラ・タ・タ・タムーちいさな機関車のふしぎな物語ー』という絵本を手に入れるべく、先輩が「下鴨納涼古本まつり」に参加する、という場面で登場する。2作品ともで取り上げられていることから下鴨神社は森見さんにとって思い入れがある場所なのだと感じた。実際に訪れてみると、「有頂天家族」のグッズや矢三郎のパネルがアニメの放送が終わった今も境内に展示されていた。

3月2日（金）

自主研修3日目に訪れた場所は、「京都電燈デナ 21 形電車」「出町柳枳形商店街」「そば処 司津屋」である。

まず、出町柳駅から鞍馬駅間を走る叡山電鉄に乗り、終着駅の鞍馬駅に展示されている京都電燈デナ 21 形電車の先頭部と動輪を見に行った。デナ 21 形は、矢二郎が蛙に化けて戻れなくなる前に、よく化けていた姿のモデルで「偽叡山電車」と呼ばれていた。実際に訪れてみると、京都電燈デナ 21 形電車に目と口が付けられて、矢二郎仕様になっていて、とても可愛かった。

次に出町柳駅に戻り、そこから歩いて出町枳形商店街へと向かった。出町枳形商店街の近くに赤玉先生の住むアパートがあり、矢三郎は出町枳形商店街で赤玉ポートワインや綿

棒などの買い物をして赤玉先生の身の回りの世話をしている。実際に訪れて気付いたのだが、出町柳駅で出るとすぐに「糺の森（下鴨神社境内）」と書かれた案内板を見つけ、下鴨神社が徒歩圏内にあった。つまり、下鴨一家の暮らす下鴨神社から矢三郎の師匠・赤玉先生の暮らすアパートは非常に近いことが分かった。

最後に出町栴形商店街を出た先にあるそば処 司津屋を訪れた。原作では「竹林亭」という名前で登場し、赤玉先生や弁天も好んで訪れていたとしている。矢三郎も店に連れていかれた際に玉子丼を食べ、「玉子丼はたしかに旨かった」と言っていた。私も矢三郎と同じ玉子丼を注文しようと考えていたのだが、メニューをみていると、玉子だけでは物足りないと思い、親子丼を注文した。味はたしかに旨かった。

おわりに

今回、実際に場所を訪れてみて最も感じたことは、登場人物たちの行動範囲の流れである。矢三郎がわざわざ矢二郎に会いに六道珍皇寺を訪れていたのではないか、ということ。黒髪の乙女が東華菜館を出た先に見えた「先斗町」の看板と細い路地に、魅惑の大人世界へ単身で乗り込んでみようと考えたのではないか、そして、そこで見つけた **bar moon walk** の 1 杯 200 円という学生に良心的価格に惹かれて訪れたのではないか、ということ。矢三郎が下鴨神社から出町栴形商店街で買い物をし、赤玉先生のアパートに訪れていたのではないか、ということ。行動範囲や移動距離、時間が明確に分かり、周りの建物や雰囲気を感じたことで、より物語への理解が深まった。また、『有頂天家族』で登場した山とみと『夜は短し歩けよ乙女』で登場した東華菜館が非常に近い場所にあったことから、違う作品でも「京都」を舞台に繋がっていると感じられ、私たちも「京都」を舞台に作品や登場人物と繋がることできると思えた。

自主研修を通して新たな発見が沢山生まれたので、改めてもう一度原作、アニメ、劇場版アニメを見返したいと思う。是非、他の森見登美彦作品についても調べてみたい。

京都の SNS 映えスポット

1 部日本文化学科 2 年 2716164 鈴木 佳穂

現在の日本では、インスタ映えという言葉や、インスタジェニック、フォトジェニックという言葉が若者を中心に流行しています。私の京都のイメージは、どちらかというと古風な日本の伝統的な町並みという印象が強かったです。しかし、現在の京都には写真映えするようなスポットがたくさんあることを知り、それらを自分の目で見たい、体感したいと考えたので、このテーマを設定しました。また、京都ならではの食にも触れたいと考えました。

まず初めに足を運んだのが、京都の中でも有名な「伏見稲荷大社」です。伏見稲荷の有名なポイントは、道なりに千本もあると言われ、朱色の鳥居が続いている千本鳥居という場所です。様々な SNS にこの千本鳥居の写真が投稿されています。実はこの千本鳥居は、朝方や昼間の写真が投稿されていることが多いですが、夜の千本鳥居もすごくきれいで、昼間とは違った雰囲気の写真の撮ることができます。私も写真でしか千本鳥居を見たことが無かったので、ずらっと並んでいるきれいな鳥居を見ることができてわくわくしました。

夕食は、先斗町という居酒屋が並んでいる町で取りました。先斗町は、1670 年に造成された、京都を代表する歴史ある花街のひとつです。そこでは「みまず屋」というお店で夕食を取りました。近江牛のステーキや京野菜のお漬物、生麴の田楽、湯葉のお刺身など京都ならではの食べ物や料理、さらに京都の地酒もいただくことができました。どの料理も盛り付けがすごくきれいで、特に京野菜のお漬物は、野菜自体の色がきれいでまさに写真映えする一品でした。

次の日は、鞍馬。貴船方面へ行きました。鞍馬は、天狗の里といわれるほど、天狗伝説で有名な鞍馬山がある場所です。また、鞍馬温泉という四季によって、違う季節を楽しみながら入浴できる鞍馬温泉があります。鞍馬温泉は美人の湯としても有名な温泉なので、女性にはぜひ足を運んでほしいです。

鞍馬山の北側に位置している、貴船神社は、湧き水におみくじを浸すと文字が浮かび上がる、「水占みくじ」が有名で、こちらの写真も SNS でたくさん投稿されています。

その翌日には、嵐山方面へ足を運びました。はじめに訪れたのは、縁結びの神さまが祀られているという「野宮神社」という神社です。ここでの SNS 映えスポットは、神社ではなく神社へ向かう時に通る竹林です。まっすぐに空へと伸びている竹が何本も並んでおり、海外から来た観光客の方々も、一生懸命写真を撮っていました。

その次に、「八坂庚申堂」というお寺に行きました。ここには、くくり猿というカラフルな布地で作られた、お守りがたくさん飾られています。このスポットはインスタグラムでかなり人気のスポットで、浴衣との相性が良く、浴衣を着て自撮りをする女性や、カップ

ルがたくさんいらっしゃいました。

また、嵐山駅には「キモノ・フォレスト」というオブジェが展示されています。京友禅



キモノ・フォレスト

という、京都の染め物が高さ2メートルほどのポールになったものが道に沿って並べられたものや、駅の中にもあります。京友禅という染め物は、日本でも有名な染め物です。京都では京友禅でつくられた着物や、アロハシャツを購入することができます。なんとキモノ・フォレストは600本もあるそうです。その柄は32種類もあり、古典的な柄やモダンな柄、ガイコツが描かれている個性的な柄まで様々でした。日が落ちると、ポールに組み込まれているLEDライトが光って、かなり幻想的な世界を演出しています。また少し歩いたところに京友禅に囲まれた、「龍の愛宕池」というパワースポットがあります。この池にいる龍に願い事をする

と叶い、この池に手を浸すと、心に

安らぎが訪れ幸せになれると言われています。ここもまたカラフルで非日常的な空間であるため、人気のスポットです。キモノ・フォレストはこの嵐山駅でしか見ることができないため、ぜひ嵐山に行った際には見に行ってください。

また、嵐山駅の近くに位置している、「嵐湯」へ行きました。このお店は、足湯とフットマッサージのお店で、出店されてから1年も経っていないという最新のお店です。このお店が人気の理由は、なんとと言っても足湯です。足湯にはなんと、季節の生花がたくさん入っていて、カラフルな見た目やアロマの香りで、気分もリラックスすることができます。

私が今回体験したコースは、お茶をしながら足湯が楽しめるコースです。日本らしい抹茶ラテやほうじ茶などを飲みながら足湯を堪能することができるコースです。また、足し湯には、コ



「嵐湯」の足湯

ラーゲンや美肌成分がたくさん入っています。そのあとには、足湯の中で、マッサージをしてくれます。旅行先で疲れた足を癒すことができ、老若男女にオススメな場所です。店員さんにお話を聞くと、フォトジェニックな足湯のおかげで、圧倒的に女性からの人気が高いとお話ししてくれました。

さらに、私が実際に京都の町を歩いてみて、町並みそのものがフォトジェニックなものだと感じました。竜馬通りという通りには、坂本龍馬が実際にいたといわれている寺田屋などを実際に見ることができるだけでなく、龍馬が実際に歩いた道を、自分たちも歩めるというところが魅力のひとつです。また、そういった商店街だけでなく、ふと歩いている町もすごく印象的で、京都の歴史や人々の思いを感じ取れることができるような道をたくさん歩くことができました。

この京都研修を通して、SNS による口コミや一般人による投稿などが、様々な分野のお店にとって影響力が



京都の町並み

高いということを、知ることができました。また、実際に京都の食や人に触れてみて、改めて京都という地は、あたたかい場所だと感じることができました。また、自分が京都の食べ物やお酒などをおいしいと感じるのは、何十年、何百年もの前の人びとが、それをおいしいと感じ、絶やさぬように努力してきたからこそ、現在私たちが口にすることができるのだと学びました。それはとても素晴らしいことで、続けていくべきだと感じました。



稲荷から見たキツネについて

1 部日本文化学科 2 年 2716166 蟬塚 咲衣

私は今回の研修で、テーマを稲荷とキツネの関係に設定し自主研修を行った。最初は京都の神社やお寺には十二支などの色々な動物が石像や装飾として描かれていることに注目し、その背景にある信仰や意味に関心を持ったが、動物の種類がとても多いことと、今回の研修では私自身がまだ一度も訪れたことがなかった伏見稲荷大社を訪れたいと考えていたため、テーマをキツネに限定した。そして、学芸員課程の受講生としての学びも深めるため、博物館や美術館を巡ることも目的にスケジュールを組んだ。このレポートでは、三日間の自主研修で訪れた稲荷神社と印象的だった博物館について記す。

まず、この研修の一番大きな目的である稲荷神社については、伏見稲荷大社、満足稲荷神社、宗旦稲荷神社、御辰稲荷神社の四つの神社を訪れた。満足稲荷神社は豊臣秀吉が出世を長い、叶ったことから名前が付けられ、戦国時代の領主が領内の五穀豊穡を願って稲荷社を建てたという武将と稲荷の関係を感じることができた。また、五穀豊穡の意味以外にも、怨敵呪詛の役割も果たしたと知り、キツネは化けて人を欺き人に取り憑く能力があると伝えられていることから、人々のキツネに対する畏怖が感じられた。宗旦稲荷神社と御辰稲荷神社は、それぞれ茶道と琴が得意なキツネの逸話が残されていることから芸事上達の神社とされている。稲荷神社と聞くと伏見稲荷大社のような五穀豊穡や商売繁盛の印象が強かったが、伝えられているエピソードによって御利益が異なるところが興味深かった。

このテーマを設定するきっかけとなった伏見稲荷大社は、自主研修一日目の昼頃に訪れた。外国からの観光客が多いせいaka色々な国の言語が飛び交い、まるで別の国に来たかのようだった。時間があまり無く山頂まで登ることは出来なかったが、本殿の装飾に神紋である稲が用いられていることや、キツネがくわえている稲や鍵に注目し、事前学習で得た情報を頭に入れながら余裕を持って見学することができた。実際に現地を見学したことで新たな発見や疑問も生まれたが、特に実感したのは事前学習の重要性だった。この研修の最終日にプレゼンテーションが控えていたため、そのレジュメを作成するために参考文献に挙げた資料を読んだ。それによって稲荷山の信仰がキツネの前はヘビであったことや、信仰がヘビからキツネに移り変わった理由、古くから続くヘビ信仰の存在、インドや中国からもたらされた密教やダキニ天信仰とキツネの関係など、直接現地に行くだけでは得ることが難しい情報を知ることができた。そして、訪れた宗旦稲荷神社とその近くに建っている弁天社の背景にはダキニ天と弁才天の習合があることや、伏見稲荷大社の古典的な社紋がヘビに見えるという考察に繋げることができたことは良かった点だといえる。しかし、伏見稲荷大社のあまりの観光客の多さに人酔いを起こし、具合が悪くなったことがこの研修で唯一の残念な点であったため、見学地を訪れる際に時間帯を考えることの大切さを学んだ。

次に、この研修で訪れた博物館などの施設は、京都国立博物館、承天閣美術館、平等院ミュージアム鳳翔館、京都文化博物館、京都市歴史資料館、京都大学総合博物館、京都市考古資料館、京都伝統産業ふれあい館の八つだった。一日に何箇所も回るため情報量が多く、混乱するかと思っていたが、どの施設も個性的でそれぞれの良さがあった。

特に印象的だったのは、京都国立博物館と承天閣美術館だった。京都国立博物館は文化財保護への力の入れ方が強く、館内の写真撮影は一切禁止で、メモを取るのも鉛筆以外は禁止であった。空調のせいかやや空気が悪く感じられたが、近代的な外見をしている施設の中には資料を守るために意図的に照明が落とされた薄暗い空間が広がっており、神々しく照らされた資料からパワーを感じた。博物館の外には噴水などの憩いの場があり、私が訪れた日は学生の団体もおり来館者が多かったが、茶室がある辺りは人が少なく、全体的に落ち着いた雰囲気だった。承天閣美術館は床が絨毯で靴を脱いで見学するため人の気配を感じることが少なく、集中して展示を見ることができた。非常に静かな展示室で足音がしないため、大きな屏風の陰からいきなり人が現われることがあり少しスリリングだが、しっとりとした雰囲気の美術館で印象に残った。

最後に、このテーマを設定し実際に京都を歩いてみて、古代の人々の動物観や宗教観の関係が、京都を何気なく歩いて目にとまった物からも見えてくることがわかった。そして、観光客の方々が動物の石像と一緒に写真を撮っている様子を見てみると、現代では神社やお寺において動物がキャラクター的な役割を果たし、その場所に対する信仰がなくても世界中の人が注目することができる存在であり、またセールスポイントとなって観光と結びついていることを実感することができた。

今回の研修では、グループはあったものの調べたいテーマがそれぞれ異なっていたことから、自主研修は三日間全てが一人での行動だった。知らない土地で交通機関もよくわからず、自主研修初日から JR を乗り間違えて稲荷駅に行く予定が宇治駅に着いてしまうなど計画していたスケジュール通りにいかないことが何度かあったが、臨機応変にスケジュールを変更し、充実した研修を行うことができた。実際に現地に赴くことでより学びを深めることができたことはもちろんだが、自分の力で行動し、疑問を見つけ解決するための方法を考えるという面においても、この研修で自分自身を成長させることができたと感じる。四年間の集大成となる卒業研究に向けて、自主的に物事を突き詰めていかなくてはならない場面では、今回の研修で学んだことを生かしながら取り組んでいきたい。

参考文献

- 安斎正人・小野正文・黒沢浩・梶山林継・平川南『祭りの考古学』(2008)学生社
坂井田ひとみ「日中狐文化の探索」(1996)中京大学教養論叢
中村禎理『狐の日本史 古代中世の人々の祈りと呪術』(2017)戎光祥出版
中村禎理『動物たちの日本史』(2008)海鳴社
中村禎理『日本人の動物観 変身譚の歴史』(2006)ビイグ・ネット・プレス
「伏見稲荷大社」<http://inari.jp/>

疲れた体に神々のパワーを

1 部日本文化学科 2 年 2716171 武田 茉里

はじめに

千年以上もの古い歴史を持つ日本の古都、京都には、長年にわたり多くの人々の信仰を集め続けた神社やお寺などが今でもなお多く存在しています。最近では外国人観光客も多く訪れ、その人気は絶えることがありません。そんなにも多くの人々が願い事や祈りをささげる場所には、おそらく強い力が宿っているのではないかと考えた私は、今回の京都研修で実際に現場に向かい、力があるのかを体感してみたいと考えました。日々部活動や資格、免許の取得、アルバイトなどで疲労がたまっていたため、京都で神聖なパワーを享受し、心身ともに清めて北海道へ帰るべく計画を立てました。結局十以上の神社やお寺を訪れましたが、このレポートですべてを紹介することはできないため、特に衝撃を受けりパワーを感じたりすることができた二つについて詳しく報告します。

鞍馬・貴船

*概要

京都最大のパワースポットと呼ばれる場所である。中でも鞍馬山は牛若丸（若い頃の源義経）が鞍馬天狗に兵法を教わった場所であることから天狗伝説で有名な土地でもある。鞍馬山の頂上にある鞍馬寺には、千手観音・毘沙門天・護法魔王尊（別名サナト・クラマ。地球に存在する魔を退治するため 650 年前金星から地球に飛来した）の三神が祭られている。ほかの神社や寺社と違う点は、「縁結び」や「商売繁盛」といったようなご利益があるわけではなく、パワーによる精神力、人間力、気の力などの生命エネルギーが高まるといった効果が得られるそうだ。しかし邪な心を持った人間が山に入ると、同じく邪なものを寄せ付けてしまうため入山しない方がよいとされている。

鞍馬山を超えると貴船神社にたどり着く。夏でも涼しい貴船は「京の奥座敷」とも呼ばれている。雪が降る日もあり、神社の境内にうっすらと雪化粧された日は格別な絶景を見ることができるとされている。水の供給を司る神であるタカオカミノカミが祀られているため、全国の水を扱う職業や、料理、調理業に携わる人々からの信仰を集めている。また貴船神社は縁結びのご利益でも有名であり、かの有名な和泉式部も願掛けをして参ったという。また、「丑の年の丑の月の丑の日の丑の時間に貴船大明神が貴船に降臨したからその時間に願い事をすると願いがかなう」という丑の刻参りの起源の地でもある。古くから「気生根」とも記され、気力の生じる根源の地として崇められているこの土地も、鞍馬と同様に最強のパワースポットとされる。

＊実際に訪れてみて

鞍馬駅で降り、鞍馬山を超えて貴船神社へと向かいました。平日の昼前だったため観光客は非常に少なくとても静かで厳かな雰囲気が漂ってきました。辺りの空気は町の方より涼しく少しひんやりとしているようでしたが歩いているうちに体は温まりました。『魔王の滝』や『息継ぎの水』、そしてそこら中に流れている水はどれも澄んでいて美しく、底まで透き通って見えました。周りには杉の木が無数に立ち並び、木の根道では木の根が地上に張り出していてとても神秘的でした。また、真つすぐであるはずの木が不自然にぐるぐると渦巻のように成長している個所をいくつか見つけました。奇妙に思って後から調べると、これはボルテックスといって地球のエネルギーが渦巻いて噴き出すところにみられる光景とされていることが分かりました。私は知床の森にも行ったこともありますが、底とはまた違ったふしぎな空気を感じることができました。

山を越えて貴船神社にたどり着きましたが、京の奥座敷と呼ばれるだけあって今時期（三月）はひんやりとしていました。辺りを見渡すと男女のペアや女性客が多く、さすが縁結びで有名な神社だなと感じました。鞍馬・貴船には坂道が多く、歩きやすい服装で参るべきです。水に紙を浮かべて浮き出た文字で運勢を占う水占みくじも試してきましたが、こちらも水の神を祀る神社ならではの感じで面白かったです。帰りに神社のすぐ近くで蕎麦屋に入り山掛けとろろそばを頂きましたが、さすが水がおいしいだけあってお蕎麦もとても美味しかったです。

安井金毘羅宮

＊概要

崇徳天皇と山中のご祭神が祀られている。崇徳天皇が流刑された際にこの場所の宮にこもって一切の欲や未練を断ち切ったことから断ち物の縁切りにご利益があるとされ、長年にわたり人々の信仰を集めている。清水寺の近くに位置している。

＊実際に訪れてみて

平日の昼間であるのに多くの人が参拝に来ていた。中でも境内にある鎌倉のようなものに人々の縁切り縁結びに関する願いを書いたお札を張り付ける場所は、まるで怨念の塊のようで少し怖かったです。訪れる人々はみな「ここって本当に効果あるんでしょ……」「ご利益すごいらしいよ」などを口にしていました。中でも縁切りに関する絵馬の内容が強烈で、普通の神社の三倍量位はあったと思われます。ちなみにその夜東京から来た人と仲良くなり、一緒に京都のおいしいご飯を食べに行きました。もしかしたらさっそくご利益が出ていたのかもしれないです……。

「茶」をめぐる京都たび

1 部 日本文化学科 2 年 2716173 田中 杏奈

今回日本文化特別演習で京都を旅するにあたって、私はテーマを「抹茶」と定めていた。というのも、日常生活を送っている中でたびたび和風バージョンと称したお菓子ではイメージ画に京都の風景、風味には抹茶味が採用され、また地方限定などのものでも京都と言えば抹茶味ということが固定されていることに興味と疑問を抱いたからだ。そういった事情で、なぜこれほど全国的にも抹茶が京都の味として認識されているのかという歴史的経緯を含め、現地ではどれほどの地位を占めているのかを調査・体感することを今回の演習の目的としたのだった。

今回の旅の道程として予定していた日程は悪天候により急遽組み替えることになった。

まず自主研修一日目は岡崎方面にある京都国立近代美術館へ行き、そのあと清水寺から三年坂や二年坂を見て回った。ここでなぜ博物館ではなく美術館へ行ったのかと思われるかもしれないが、実は美術館で京都の「茶」文化を見ることができないとはいえないのだ。というのも、美術館はじめ博物館と呼ばれるものには大抵の場合、その博物館ごとの理念に沿った、博物館自体が保存している資料を持っている。その資料たちは、美術館ではコレクションギャラリーと呼ばれる常設展で通年展示公開されていることが多い。つまり、今までに見てきた他の美術館のコレクションギャラリーと展示内容を比べると京都市がどういったことに視点を置いて美術を考えているのかがわかるということだ。そんな視点で美術館を見ていると、なんと、京都の美術館には茶器までも展示してあったのである。これは北海道の博物館では見たことがなく、それだけ京都は「茶」というものに馴染みがあるということがわかった。そのあと清水寺の前の土産物通りを見て、現在の「茶」の在り方について見て回ったが、その中でわかったことは、やはり抹茶味の土産物の多さである。抹茶味のバームクーヘン、クッキー、ソフトクリームなどの洋菓子との組み合わせは当然ながら、抹茶味のコーティングした豆など一見マッチするのか首をひねるような組み合わせもあったりした。当然ながら美味しくできていたが、ここで言いたいのはつまり、ありとあらゆる土産物と結び付けてしまうほど、観光客に対して京都のアピールポイントになっているということだ。

二日目はホテルの近くにある茶道資料館を見たあとに京都における「茶」の本拠地たる宇治まで足を運んだ。茶道資料館は茶道の大きな流派の一つである裏千家が運営している博物館の一つだ。今回はたまたま照明の不具合によって急遽無料で入館できることになり、裏千家が保有する数々の名品を無料で見ることでとても幸運でした。こちらでも常設展と期間限定の企画展があったのだが、常設展のほうには茶器を中心に展示しており、茶道に関する器物の名称などの基本的知識を学ぶことができるようになっていた。さらに、入場券とともに裏千家の茶をいただくことのできるお茶券ももらい、本家の茶を体験する

ことができてとてもよい経験ができた。そのあと地下鉄やバスを乗り継いで宇治へ訪れた。宇治ではちょうど宇治の町を挙げてお茶の京都博というキャンペーンのようなものをやっていたので、これ幸いとありがたく便乗して、お茶の京都博の一つである平等院ミュージアムを目的として宇治駅から徒歩で平等院鳳凰堂まで歩いていった。このときはまだ、キャンペーンの一角とはいえ元々専門の博物館である茶道資料館ほどの情報量は無いただろうと平等院ミュージアムについて考えていたが、すぐに考えを改めることとなった。宇治の茶の歴史がほぼこの平等院ミュージアムに特設された一角のコーナーで網羅されきっていたのである。内容もまた茶道資料館とは異なっていて、京都市内の二条城付近に密集している千利休を祖とする茶道の表千家、裏千家、武者小路千家の本家とそれに付随する情報が語られていたが、宇治では平等院鳳凰堂を建設した藤原頼通の家来、候人たちやそれより後世に栄えた茶商など、宇治を茶の名産地にまで押し上げた人々の歴史と功績が町を挙げて取り上げられていた。たしかに資料の量などは茶道資料館などとは比べものにならない少なさではあるが、のせられている情報量はそれだけで教科書一冊分に値するほどのものであり、ここに宇治の茶に寄せる想いの強さを見せつけられた気分であった。その中で知った「抹茶は茶の一種類であり、分類するならばほうじ茶や玉露と並列する」という事実は私の中でたいへんな衝撃をもたらした。思えば、京都の店に入って出されるウェルカムドリンクは抹茶ではなくほうじ茶が多いし、抹茶味の土産物と並んでほうじ茶味の土産物もかなりの量があった。意識してみなければ、知らなければ気づけないことも多いようだ。さて、そのあと宇治の町を歩いてみると、平等院ミュージアムで学んだことを証明するように、前日に歩いた清水寺の土産物通りとは異なり、抹茶味のお菓子などではなくお茶そのものが売られているお店が多くあった。そしてまた全国にその名を轟かせる茶の名店の本店が宇治には多く軒を連ねていたのも印象的であった。

三日目は大阪の堺まで行き、茶の湯の名人であった千利休について知るべく、さかい利晶の杜を訪れた。さかい利晶の杜は堺市が誇る偉人、千利休と与謝野晶子両名の記念館であり、当日参加可能な茶室も併設されている公共施設である。私もせっかくの機会だからと展示を見たあとに茶室を利用したのだが、そのときに出されたお茶の器を指して「これは千利休が使ったと言われる井戸を描いたもので、後ろに見えるのが実物です」と言われたのがこの日一番の衝撃ポイントであった。

今回の旅を総集すると、京都は「抹茶」だけではなく日本全国に誇れるものとして「茶」と親しみ深い町であること、そしてまた、茶の湯という文化を大事に育んでいることが舌や肌を通して深くわかったよい旅であったといえる。

さて、今回の特別演習では3日間自分一人で行動をしたが本当に楽しい旅であった。自分の思う道を自分の好きなペースで歩くことのすがすがしさは、今の年齢ではなかなか覚えることのできない貴重な体験だったように思う。しいて言うならば同行者がいなかったために写真をあまりたくさん残すことができなかったことがわずかな心残りである。

“伝統”を守る都市

1 部日本文化学科 2 年 2716210 道野 由樹子

はじめに

私は、今回の研修で日本の伝統文化をテーマに京都・奈良の散策を行った。当初は日本史をテーマにしていたが、それではあまりにも漠然としたテーマであると考えたためと、自主研修をするにつれて、日本の伝統文化に対する関心を強くもったため変更した。また、裏テーマとして、私が応援している KinKi Kids の堂本剛さんにゆかりのある地の巡礼を設定している。

このレポートでは、これらのテーマをもとに私が訪れた場所の中でも、特に印象的だったところについて、日程順に紹介したい。

2 月 26 日(月)

この日は空港からホテルへ移動する日だったため研修に向かう予定は無かったが、時間に余裕があったためホテルから近い晴明神社に行くことにした。晴明神社に足を踏み入れて私が一番初めにしたことは、厄払いのご利益があるという「厄除桃」を撫でることである。「厄除桃」は多くの観光客に撫でられたのか、特定の場所が新品のように輝いていた事が少し面白かった。

次に、私がしたことは「顕彰板」を見ることである。事前学習で、安倍晴明にまつわる伝説が書かれている展示物であると学んでから是非読んでみたいと考えていたのだ。境内には 10 枚展示されており、内容には、晴明の母親が狐であるというものや、晴明のライバルだったとされている蘆谷道満との法力勝負、また、晴明の陰陽師としての能力に関するものなどがあった。

また、文字だけでなくそれぞれの場面を表している絵も描かれており、視覚的にも内容がわかりやすかった。これは、陰陽師や妖怪といった日本ならではの存在を後世に受け継いでいくための工夫なのかもしれないと感じた。

2 月 27 日(火)

研修二日目は団体研修を行った。その際に紹介を受けた竜馬通り商店街が特に印象的であった。名称の通り、お店のシャッターであったり、案内板であったり、記念撮影用の顔出しパネルであったりと、至るところに坂本龍馬がいる商店街なのである。また、私は「これこそまさに京都」というような古風な景観にも心惹かれた。もちろん京都では全体的に伝統的な景観を保っているという印象を持っていたが、案内とともに講師をして下さった先生が仰っていたように、この商店街ではその景観作りが徹底されていると感じたのである。その理由について、先述の先生が、京都市内でも比較的観光客を集めることを目的にして

いる場所であるからだと教えて下さって納得した。観光客の私にとって、それほどまでに京都らしく、素敵な商店街だったのである。また、観光客のためとはいえ、伝統的な景観を維持することは簡単ではないと思うため、竜馬通り商店街では京都の伝統に対する誇りが感じられた。もし、今後京都に行く機会があればのんびりこの商店街を歩きたいと思うが、財布の紐が緩みすぎてしまうことには注意したい。

団体研修終了後、初日と同様時間に余裕があったため、友人と共に伏見稲荷大社を訪れた。大社へと続く登り道には屋台が並んでおり、多くの観光客で賑わっていた。そこには狐を模した小物やお菓子が売られていたり、抹茶を使った京都らしい食べ物が売られていて、歩いているだけでもとても楽しかった。

大社へ着いてからは友人と千本鳥居に挑戦し、どうにか山頂まで登ることができた(ただ、この日の疲れは翌日まで響いた。ロングスカートと素材が硬めの靴で登るべきではなかったと反省している)。

登っている最中に、鳥居には同じ朱色でも、少し色褪せたものから鮮やかなものまであることに気付き、それが不思議だったが、山中の貼り紙を見て鳥居の奉納が行われていることを知り「なるほど」と思った。色褪せたものは古いものであり、色鮮やかなものは奉納されて日が浅いものなのだろう。

また、折れてしまっている鳥居を見つけ、やはり一見丈夫そうな鳥居でも朽ちて壊れてしまうものなのだと感じた。それと同時に、だからこそ鳥居の奉納が必要なのだろうと考えた。そう考えると、現在の伏見稲荷大社の千本鳥居は人々の奉納によって維持され、支えられているのだろうと思う。

京都の人々が伝統文化を大切に思っている気持ちを感じた一日だった。

2月28日(水)

研修三日目であるが、自主研修としては初日であったため、朝から自由に行動できることが嬉しかった。私が少し早めにホテルを出発して向かった場所は平安神宮である。

平安神宮は、KinKi Kidsの堂本剛さんがソロライブを行う際の会場の一つであるため、以前から行きたいと考えていた場所である。

好きなアーティストが見たであろう景色を、一度見てみたいというファン心が働き、ライブではステージの背景となつたらしい大極殿に立って、客席となつた応天門の方面を見渡した。当然パイプ椅子もなければファンもいないので(もしかしたら私と同じ目的のファンの方がいたかもしれないが)白い砂利が一面に広がって見え、その白に応天門や、その他の建物の赤が映えて絶景だった。

また、境内では何かに守られている感覚があるように思えた。私の気のせいなのか、実際に神様の力が働きかけてくれていたのかはわからないが、とても安心できる空間だった。

余談ではあるが、去年は堂本剛さんが体調不良に陥ったため、平安神宮でのライブが中止となった。ライブが予定されていた日程の平安神宮の様子について巫女さんにお話を伺

ったところ、たくさんのファンが平安神宮を訪れ、絵馬を買い、参拝していったことを教えて下さり、温かい気持ちになった。私も遅くなってしまったが、剛さんの耳の調子が良くなるようにと願いをこめて参拝した。そしていつか、平安神宮で歌う剛さんを見たいと思った。

休憩しようと思ったのは「祇園小石」というカフェである。ここは、以前 KinKi Kids がロケで訪れた場所である。店員さんにファンであることを伝え、快くロケで使用したテーブルに案内して下さい、とてもありがたかった。注文した苺のパフェは絶品だった。夏はかき氷も提供しているというので、いつか夏に訪れてみたい。

続いて向かったのは霊山歴史館である。ここでは明治維新にまつわる様々な展示物を見ることができた。写真撮影コーナー以外での撮影が禁止されていたことは残念だったが、興味深いものが多くあった。明治維新で活躍した偉人についての映像資料や、実際に使用していたとされる武器(刀・銃・砲丸)に触れることのできるコーナー、パソコンでできる歴史クイズ、偉人の和歌などである。特に和歌は、偉人の性格が表れているように思えて面白かった。これらの展示を見て、霊山歴史館は子どもから大人まで楽しみながら明治維新について学べる場所だと感じた。

また、坂本龍馬の銃が高杉晋作から送られたものであるという逸話や、高杉晋作が鉄扇を武器として用いていたという逸話も紹介されており、有名な偉人の知らなかった一面も知ることができる場所であると考えてる。

明治維新に関する様々なことを再確認し、また、新たな知識を得ることができて、充実した時間だったと考える。

3月1日(木)

春の嵐が西日本に直面した影響で、朝から雨が降っていた。外に出ることが億劫になったが、この日はどうしても行きたくて、行かなければならないところがあった。奈良である。京都と同様に伝統的な都市であるため是非行きたいと思っていたし、剛さんの出身地でもあるため、ファンとして行かなければ帰れないと思っていた。

奈良駅からバスに乗り、春日大社前で降りるとすぐに鹿と出会えた。正直な感想としては「えっ、もういるの？」である。バスを降りてすぐ会えるとは思っていなかったので少々驚いた。鹿と同じ道を歩かせてもらいながら春日大社へと向かうと、バス停の比ではないくらいの鹿が出迎えてくれた。春日大社では参拝をし、神様の使いであるとされている白鹿のおみくじをひいたところ、大吉だった。神使が運んできてくれたものだと考えると、期待してもいいのかもしれない。

春日大社を出て、今度は東大寺に向かった。この辺りでだいぶ鹿と一緒に歩くことに慣れてきたため、鹿に鹿煎餅をあげてみようと思い立った。鹿煎餅は袋に入れて鹿に見えないようにすると襲われないのだと友人に教わっていたので、袋に入れて持ち歩いたのだが、すぐに気付かれてしまった。服を噛まれつつも、初めて鹿に鹿煎餅を食べさせてあげるこ

とができて楽しかった。

東大寺では、「大仏殿」を拝観した。中に入ってすぐに、大仏を見ることができたのだが、教科書でしか見たことのない「奈良の大仏」は、想像以上に大きくて迫力があり驚いた。大仏を見上げる人の中には外国の方も多く見られた。

大仏の他には、東大寺やその歴史を説明するパネルがあった。そのパネルには、日本語だけでなく、英語や韓国語などの外国語表記での説明も書かれており、外国の方にもっと詳しく日本文化を知ってもらうための工夫なのだろうと感じた。そのような工夫があるからなのか、外国の方も日本の観光客と同様にそのパネルを熱心に読んでいたことが印象的であり、日本文化に興味をもってもらえていると感じて嬉しかった。

次に、くぐると無病息災のご利益があるという「柱くぐり」を体験した。柱の穴は狭い上に長さがあるのでつかえそうで怖かったが、無事にくぐり抜けることができた。今年も元気に一年を過ごすことができそうである。

この日は唯一私が同室の友人よりも遅くにホテルに帰館した日である。私が奈良を満喫するためには、一日では足りなかったようだ。大学在学中には是非もう一度訪れたい。

3月2日(金)

この日までに事前学習で予定していた場所は全て見学し終えており、やるべきことは翌日の発表準備のみとなっていたため、好きなことをやろうと思った。

まず、団体研修でも訪れた月桂冠大倉記念館に行き、団体研修では迷って結局買わなかった梅酒のようなワインを購入した。

次に、母に頼まれていた金平糖を買いに、金平糖の専門店であるという緑寿庵清水に行った。色々な味があり、どれを買おうかととても迷ったが、いちごミルクと抹茶と桜の味のものを購入した。どれも美味しかった。京都は食べ物も伝統的なものが多く、美味しいのだと改めて知ることができた。

最後に

私は今回の研修を通して京都・奈良の伝統を守ることに對する真剣な姿勢を学ぶことができたと考える。それは、街の景観を守るためや、伝統的な文化を観光客に伝えるための工夫である。

また、私は今まで、日本の伝統文化というものをなんとなくしか知らなかったのだと気付いた。今回の研修では、それをほんの少し、本当の意味で知ることができたのではないかと思う。

初めは長いと感じていた 5泊6日だったが、あっという間に過ぎ去り、まだ足りないと思うほどに充実していた。是非また訪れて、今回は見逃しているであろう様々なことを知りたいと思う。

世界遺産を知る旅

1 部日本文化学科 2 年 2716219 山田 夏菜子

はじめに

今回の研修旅行では、古都京都の世界遺産を訪れ、なぜ世界遺産として登録されるに至ったのかを実際に目の当たりにすることでその意味を考えること、また、世界遺産として登録されていても納得できるほどの有名なスポットにも訪れ、なぜ世界遺産登録に向けて推薦されていないのかを考えること、この2点を旅の目的として観光しました。京都の世界遺産は、「古都京都の文化財」として登録されているため、世界遺産に指定されているのが17カ所と数多くあり、全て見物するには限界があったので、ここでは見物して素晴らしいと感じた世界遺産、そして、世界遺産として登録はされていないが有名であるスポットについても触れていこうと思います。

二条城

二条城は徳川家最後の将軍である慶喜によって大政奉還が行われた場所であり、特別名勝に指定されている二の丸庭園なども有名ではありますが、その内部を見てみると、実にその時代ならではの工夫が施されているように感じました。例えば、天井を見上げると、模様や色が各部屋や区画ごとに異なっており、一見どの部屋も同じように見えますが、天井を見ることでそれぞれの部屋に役割が与えられているように感じました。また、将軍と大名たちが対面する場所となっている大広間は段ができており、下段は大名、上段は将軍が座するという仕組みではありますが、こちらでも天井を見上げてみると、将軍が座る上段の天井は、大名たちの座る下段の天井よりも高くなっており、これは二重折上格天井と呼ばれ、将軍家の権力の象徴だそうです。権力の象徴といえ、将軍が使用すると思われる部屋の襖には権力の象徴と言いつた「虎」の絵が複数描かれており、他にも様々な絵が描かれた襖がありましたが、虎が描かれた襖が一番多いように感じました。さらに、将軍の居間や寝室とされた白書院は、プライベートを重視した部屋であるため、襖は淡い水墨画で描かれ、落ち着いた雰囲気させる工夫がなされてありました。一方で、老中の部屋は、これといった豪華な装飾ではなく、こだわりを感じさせない部屋の造りとなっていました。このようなことから、将軍家はとにかく自分たちの権力を誇示することを一番に考え、大名たちに逆らわれないような強大な存在なることを常に意識していたのではないかと感じました。それは、天井のような普段あまり視界に入らないようなところまで工夫を凝らしていることから、やはり徳川家としてのプライドを守り続けたいという強い信念が窺えると思います。だからこそ、徳川家は15代まで続くに至ったのではないのでしょうか。工夫の仕方が多様で独特であり、知識量の少ない私が言うのも恐縮ではありますが、これまでに述べた点から二条城が世界遺産に登録されているということも納得できま

す。

龍安寺

龍安寺は枯山水の石庭が有名であり、その石の総数は 15 個ですが、どの角度から見てもいずれかの石と石が重なっており、14 個に見えるというので実際に体験してみると、どの角度から見ても一個だけがしっかりと隠れているので、「1、2、3、4、...14、あれ、一個石が見つからない。どの石が隠れているの？」と間違い探しをしているような感覚で楽しむことができました。今回私が龍安寺を訪れた日は、外国人の観光客が大半だったので、このようなユニークなアイデアは、万国共通の面白さがあるのでしょうか。また、そのような点が世界遺産に登録されるポイントになるのかもしれませんが。

世界遺産に登録されていない有名なスポットについて

今回訪れた世界遺産に登録されていない有名なスポットは、南禅寺、伏見稲荷大社、平安神宮です。これらのスポットを目のあたりにして、世界遺産登録に推奨されていない理由を考えたところ、南禅寺は「古都京都の文化財」が世界遺産として登録された 1994 年の時点で文化財として認められておらず、2005 年になってようやく国の史跡に指定されたこと、また、有名ではあるが明治維新後に造られた水路閣がある南禅寺を「古都京都の文化財」に追加することがふさわしいのかという疑問も挙げられる可能性が考えられます。また、平安神宮も、明治時代の 1895 年に平安遷都 1100 年記念ということで桓武天皇をご祭神として創建されたことから、「古都京都の文化財」としてふさわしいとはいえない部分があるのかもしれませんが。伏見稲荷大社については、本殿など重要文化財も多くありますが、南禅寺と同様に「古都京都の文化財」が世界遺産として登録された 1994 年にはまだ文化財として認められていなかったことと、鳥居を奉納できる点で世界遺産登録の規定に当てはまらない部分もあるのではないかと考えられます。

最後に

今までに 3 度京都を訪れた経験がありますが、今回世界遺産をテーマに京都を巡り歩いてみると、今までとは違った視点で京都の歴史的景観を楽しみながらも学ぶことができたので、とても充実した 5 泊 6 日となりました。また、今回訪れた世界遺産の拝観を通して思うのは、その時代に生きていた人の知恵や物事に対する考え方がしっかりと反映されているということです。前述に二条城を大きく取り上げましたように、二条城はとにかく権力を誇示するための工夫が施されていたように感じました。これからも、その時代その時代で異なる文化や伝統を学ぶことで自分の経験や知識を増やしていきたいと思います。

参考文献

芦沢泰仁編『ブルーガイド・ムック 京都おさんぽマップ』2015 年、実業之日本社

京都・大阪のパワースポットを巡る

1 部日本文化学科 4 年 2714115 長田 亮太

歴史的建造物が多く集まる京都において、もっとも存在感を示すものはお寺である。歴史的にも寺なくして京都の繁栄なしといっても過言ではない。歴史を感じられるお寺、パワースポットである場所にいてみて、なにか自分に取り入れられるものを見つけた。大阪でも、パワースポットを巡ったが、たくさんものに目を触れ感じるものがたくさんあった。一日目は、御香宮の、大手筋商店街を渡り、龍馬通りにでた。ここでは、パワーストーン京屋があり、坂本龍馬のグッズが販売していて、そこにパワーストーンもある。そして月桂冠大倉記念館や、黄桜の記念館にもいき、本場の名水の日本酒を味わってきた。

その後、伏見稲荷大社に行く。私が一番目玉としていた寺である。伏見稲荷大社は京都市伏見区にある神社で全国に約 3 万社あると言われる稲荷神社の総本社。稲荷山のふもとに本殿があり、稲荷山全体を神域としているため境内にはいたるところに稲荷神社を象徴する狐がいる。境内の後方にある稲荷山の奥宮から奥社につづく参道には朱塗りの鳥居がずらっと隙間なく立ち並んでいて、まるでトンネルのように延々と続いていた。この鳥居をくぐりながら心眼成就・商売繁盛を願うとご利益があるとされている。この辺りは神が降りてくる山の入口にあたるとされているため神が住む幽界への関門として稲荷山全体で約 10000 基の鳥居が建てられたそうである。また、この鳥居が朱色なのは朱色が魔力に対抗する色だとされているからだという。そして、これらの鳥居は江戸から明治時代に参拝者の奉納によって建てられはじめたため、それぞれに企業名や個人の名が記されていた。願いが「通る」もしくは「通った」という語呂合わせから生まれた信仰で、願いが「通る」ごとに大きな鳥居に変えて奉納する風習もある。

千本鳥居を通り抜けると、おもかる石があった。奥社奉排所の右奥に 2 つの石灯籠があり、どちらかの石灯籠を選び、その前で願い事をしてから、「おもかる石」の名で親しまれている石灯籠の頭を持ち上げ、持ちあげた時に予想よりも軽かったら「願い事が叶う」と言われていて予想よりも重ければ「願い事が叶わない」と言われている。重いと感じるか、軽いと感じるか、自分の願いが叶えられるかどうか試したくなる。私はやってみたが、重いか軽いかわからなかった。しもうがここから稲荷山をぐりとまわる「お山めぐり」コースがあります。より京都伏見稲荷大社のパワーを感じたい方にとってはおすすめだが。1 周約 4 km で、ほとんどが階段あり 2 時間はかかるので時間に余裕をもって訪れるべきである。標高も 250m くらいあるので、登山するような体力が必要である。

自主研修では、三十三間堂、清水寺、八坂神社、南禅寺、銀閣寺などを巡った。八坂神社では、面白みのあるスポットが多々あった。本殿向かって右側には、龍穴から湧き出ている「力水」という御神水が汲めるので、飲み水としては利用できず、直接手で触

れるというもの、水を飲むという概念ではなく、触るという概念がなかったため、新しい感覚が感じられた。僕は船岡 誠先生のゼミ生であって、よく禅について話をしてもらっており、南禅寺にいき、座禅をしに行くことができた。南禅寺には、物事を成功に導いてくれる気運があふれている。敷地が広く、なによりも一番驚いたのが、敷地内に、幼稚園があったこと。お寺の中に幼稚園がある文化など、間違いなく京都ならではの文化であるだろうと感じた。

大阪では、通天閣に行き、そこもパワースポットとしてよく知られていて、5階の展望台には、足の裏を撫でると幸運が訪れるという言い伝えがある「幸運の神様」となるビリケン像があった。新世界のいたるところにビリケンが存在し、飲食店などには必ずひとつはビリケンが置かれているほど神様として大切にされているのだと感じた。道頓堀へいき、街並みを拝見しにいった。ド派手な風景と、人間情緒溢れるアグレッシブな人々の中にといて悩んでいることがあってもふき取ってしまうような雰囲気があった。

そして私は食べ物に関して、京都や大阪に行くからにはたくさん美味しい物を食べようと決めており、名物をたくさん味わった。わらび餅、八つ橋、にしんそば、おぼんざい、たこ焼きやお好み焼きなど、名物がたくさんあるため、毎日食べていた記憶しかない。わらび餅や八つ橋は、商店街で口にしたが、私は餅が好物のため、京都人がこんなにたくさん甘くて柔らかいお菓子を毎日のように食べているのだと考え、羨ましく感じた。中でもおぼんざいを清水寺の花かがみという店で食にした。湯豆腐や漬物、魚など、和食とはこれだというようなバランスのとれた、食種がたくさんあり新鮮味のあふれるものであった。日本料理を普段あまり口にすることがだんだんとなくなっている今の日本であるが、和を大切にしている姿勢が、店内の料理人から伝わった。他にもたくさんの食べ物を食べたが、北海道と違い、日本文化の和を全面におしだしている食べ物が多く、これもまた外国人観光客が多い理由のひとつでもあることを認識し、和をより再認識させられるものであった。

京都、大阪のパワースポットを巡る旅だったが、自分が想像した以上に、歴史的建造物の刻まれた歴史の雰囲気や自然の素晴らしさ、日本人ということに再認識させられるほどの圧倒的な雰囲気が京都にはあった。伏見稲荷大社では他のお寺とは違った千本鳥居からなる独特の雰囲気を感じ、他にもたくさんのお寺を拝見した。今まで学んできた日本文化の集大成となる授業であったため、非常に学習になった。そして京都人は、家の前で空を見上げお祈りするくらい信仰深く、京都の街を大切に、共に生きていく様を感じることができた。たくさんのお寺を巡ったことが、たくさんの神様がいて、これから社会に出る身として、京都や大阪のパワースポットを巡り、日本人というものを深く知ることができ、今までの文化、これからの文化が楽しみになり、また大切にする義務があると思う。これからたくさん日本の日本を見ていきたいと感じさせられる研修であった。

東山慈照寺の散策

1 部日本文化学科 4 年 2714183 藤林 幹生

今回参加させていただいた 6 日間の日本文化演習において、私は京都の由緒ある建造物をいくつも拝観した。特に自主研修最後の日となる 3 月 2 日に訪れた東山慈照寺（銀閣寺）について、私は特に関心を持った。鹿苑寺（金閣寺）のような派手な建造物を造った足利義満の孫、義政の建造物がどのようなものなのかを実際に目で見て調査したいという思いからである。

慈照寺に至るまでには「哲学の道」と言われる場所を通る必要がある。「哲学の道」

とは、哲学者である西田幾多郎が物思いに耽りながら歩いたとされる道の事である。本来であれば、満開の桜の下を潜って歩けるスポットである。見学した時点では桜は咲いていなかったため、澄んだ空を見上げながら歩くこととなった。周りは静かで雰囲気は大変のどかであり、近くにある椅子の上に座りながらゆっくりと過ごしている方も見受けられた。このように周りの人々の様子や、「哲学の道」を歩いた時の私の心の平穏さを思い出すと、西田に限らず多くの人々が



哲学の道と桜の木

時代を問わずこの道に魅せられているのではないかと思った次第である。

慈照寺は、8 代目将軍の足利義政の山荘である。外観は、黒の漆塗りが施されているという特徴がある。銀箔においては 2007 年に行われた科学的調査において、貼られていないことが明らかになっている。ちなみに、私が最も着目した点は柿葺という技法で造られている屋根である。薄い板を 3 センチずつずらしながら重ねて組み合わせていくという技法とされている。この屋根を近くで見たとき非常に繊細で緻密なつくりであるという印象を受けた。遠くから見たときは、黒のスエード生地のように見えシックさが表現されているように思えた。近くで見たときと遠くで見たときでは見え方に違いを感じたが、どちらにせよ観音殿の中でも気品とこだわりが最もある部位だと私は感じた。観音殿を過ぎて少し歩くと、「お茶の井庭園」というところに到着した。こちらは、漱蘇亭と呼ばれる庭にある竹の休憩所が存在していた場所であり義政愛用の場であつたらしい。ちなみに、休憩所跡には綺麗な水が流れている。今現在もお茶会がある際には使われるほどの物らしい。私が水をのぞいてみたところ、濁りがなく下の面まではっきりと見ることができた。京都はお茶産業も有名ではあるが、京都の

良質なお茶を支えているのは「お茶の意庭園」で見ると透き通るほど綺麗な水なのだなということを強く実感した。良いお酒は良い水からと聞くが、お酒に限らず良いお茶も良い水からなのであろう。



慈照寺の柿葺屋根

慈照寺散策の最後に、慈照寺の緑を管理していると思われる男性に出会うことができた。お会いした時は先の尖った器具を地面に刺し、酵母菌を注入するという作業を行っていたらしい。酵母菌を注入することで、土壌が元気になり木が育つというメカニズムらしい。慈照寺は緑が多く、樹齢 500 年の木（千代の槇）など数多くの木も存在する。東山慈照寺という世界遺産を取り囲む美しい自然は、地道な手入れの積み重ねによって支えられているということを学ぶことができた瞬間だった。

今回の日本文化演習を通して、これまで文献で見るだけであった歴史的建造物を直接見ることができ身体で感じることもできたという点は大きな収穫であったと思う。観音殿に使われている年季の入った木材を直接見たことで、当時の人々の息遣いを少しながらではある体感できたときが一番うれしかった。また、レポートで取り上げた屋根のような細かな造りの部分は直接目で見ていなければ建築の工夫を感じることはできなかったであろう。この研修で学んだ知識をしっかりと理解して、近いうちにもう一度一人で京都を訪れ見識を深めていきたいと考えている。

参考資料

『広辞苑』第 6 版 2008 年 岩波書店

『明鏡国語辞典』第 2 版 2010 年 大修館書店

銀閣寺・東山慈照寺 公式パンフレット

雑学総研『大人の博識雑学 1000』2016 年 角川書店

日本文化の集大成

1 部日本文化学科 4 年 2714184 古川 仁貴

私は、これまでの大学生活で学んだ日本文化を、古都京都へ赴くことで自らの肌で感じ、文化というものを再考するべく、主に寺社などを回ることになった。その中でも特に印象の強かった場所が三十三間堂、禅林寺、哲学の道だ。なぜなら、私の卒業論文のテーマが法然の死生観であるため、これらの寺は、法然に関係のある場所だったからだ。また、哲学の道は、以前から興味があり、ぜひとも一度は歩いてみて、文化というものを考えてみたかった。そのため、この研修レポートでは、先述した 3 つにスポットを当てて報告をしていきたい。

まず、三十三間堂についてだが、ここは日本一長い歴史的木造建築物として知られる。正式名称は蓮華法院で、その中の本堂が三十三間堂である。この三十三の意味だが、柱間が 33 個も存在する特徴的な建築からこの名がついている。また、観音菩薩が時と場に応じて姿を変え、我々衆生を救いにやってくる姿が 33 種類あるということを反映している。観音様は、1,001 体いてそこにプラスして、千手観音菩薩坐像、守護神である風神と雷神、従者の二十八部衆像、そして、千手観音菩薩立像が合わさり、全部で 1,032 体にもなる。その中には、自分の思いの人の顔を、見つけることができると言われているが、私は、観音様の顔の違いがあまりわからなかったため、見つけることができなかった。三十三間堂には、名号石とも言われる法然塔が存在する。私自身、卒業論文のテーマで法然を扱っていたため、以前から気になっていたものでもある。法然塔には、南無阿弥陀仏が刻まれており、後白河法皇の 13 回忌法要を行った際、これを人々に書写して分け与えたとされている。そして、その場所が三十三間堂だったのだ。卒業論文では、法然の死生観を研究しており、この法念塔は、死生観とは直接的な関わりはないのだが、死生観というものの自体、法然が生きた一生から研究するものであるため、この塔の存在も重要となってくるのである。私は、三十三間堂で、自らの目を見て歴史を感じることの素晴らしさを再確認することができた。

次に私が回ったのが、浄土宗西山禅林寺派総本山の禅林寺である。法然は、浄土宗の開祖としても知られているため、この寺には 1 度訪れてみたかった。禅林寺は、通称永観堂とも呼ばれ、地元の人々に親しまれている。本尊は、阿弥陀如来立像であり、顔を左に曲げた姿で、見返り阿弥陀如来とも呼ばれている。私が、訪れたときは、僧侶の方もいらしており、この見返り阿弥陀如来の意味を尋ねたのだが、これは、集団の先頭に立っていたとしても、皆を置いて行かない慈悲の心を表していると教えてくれた。この本尊が置かれている空間は、薄暗く、少々重い雰囲気であった。それほど、この本尊である見返り阿弥陀如来から、覇気を感じたということなのだろうか。元々、禅林寺は、11 世紀末永観が浄

土念仏を進めた、念仏修業の場でもあった。つまり、法然との関わりも強く、当時の念仏修行の際に醸し出される雰囲気を感じることができ、これまでの研究をより一層豊かなものにしてくれたのである。さらに、法然への理解も深めることができた。これは、禅林寺に置かれた資料館のような場所で、念仏修行の場所のことや、阿弥陀仏について事細かに書かれていたため、これまでの研究で調べてきたモノや情報を、自らの目で見ることができ、非常に興味がわいた。この寺は、金閣や銀閣、清水寺のように誰もが知っているような寺ではないが、事前に下調べなどをして、訪れてみることで新しい発見をすることができる場所ではないだろうか。少なくとも私にとっては、浄土宗の歴史を嗜むことができた貴重な時間になったのだ。

最後に紹介するのが、京都大学の哲学者で有名な西田幾多郎が、思案を巡らしながら散策したといわれる、哲学の道だ。この道の近くには、法然院が存在し、西田が詠んだ「人は人 吾は吾也 とにかくに 吾行く道を 吾は行く也」という歌の石碑が建てられていることも有名である。私も哲学の道を、物思いにふけながら歩いてみたのだが、落ち着いた町並みの中で考えることは、非常に頭が回りやすいことがわかった。また、この研修を日本文化の集大成とするべく、古都京都の赴き深い空間で、ひと時の文化に触れるという時間を嗜むことができた。哲学の道の近くには、浄土院という大文字山の送り火を管理する寺も建てられている。浄土院もまた、その名のとおりに浄土宗であり、本尊である阿弥陀如来坐像は、等身大のものである。私は、一目見ただけで、本尊の迫力に惹かれ、見入ってしまった。禅林寺の見返り阿弥陀如来とは違い、浄土院では坐像のため、威厳さが増したようにも見えたのだ。やはり、ここでも実際に訪れてみることで、初めて気づかされることは多かった。文化は、教えられるものではなく、自らがその文化に触れ、考えることが重要になってくるものではないだろうか。私は、これまでの研究を生かし、大学生活四年間の集大成を作り上げることができた。

以前、郡司先生から文化という言葉の意味を、事前に下調べした上で、この研修に行くようにというお告げがあった。ブリタニカ国際大百科事典によると、文化とは、人間の知的洗練や精神的進歩とその成果、特に芸術や文学の産物を意味する場合もあるが、今日ではより広く、ある社会の成員が共有している行動様式や物質的側面を含めた生活様式をさすことが多い、と書かれている。つまり、古都京都で見てきた、あるいは触れてきた文化というものは、今日に至るまでに積み重ねられてきた人々の知恵と技術の集大成であるのだ。現代を生きる我々にとっては、あまり気にかける点ではないが、今、何不自由なく生活できているということは、決して当たり前なのではなく、かつての人々が築き上げてきた歴史があってこそなのである。そのことを忘れずに、日本文化を表現している町が京都であり、京の都を訪れることで、また我々も日本文化の素晴らしさを享受することができるのではないだろうかとは私は考える。四年間の研究を、今回の研修で体現化することができた。非常に有意義なものとなったのである。

京のかわいい神使たち

2 部日本文化学科 2 年 2816101 青山 裕香

5 泊 6 日に亘る研修旅行は本当にあつという間だった。天候にも恵まれ、班員と助け合いながら楽しく過ごすことが出来た。私自身、京都を訪れるのは高校生以来で、成人して初めての旅行だった。全員で月桂冠と黄桜の酒蔵を巡り、京のお酒を楽しむことが出来た。京都という町は、年を重ねるにつれて新たな魅力を感じることでできる場所だと思った。

旅行中、酒蔵に加え、大小様々な神社を巡ることが出来た。行く先々でお参りをし、各神社で出会った動物達と記念撮影をした。動物たちというのは、それぞれの神社に祀られている神様に仕える動物たちのことで、いわゆる「神使」のことである。

そもそも「神使」というのは、神様に仕えて、神の代わりに現世と接触する役割を果たす動物たちのことらしい。旅行中、レポートについてぼんやりとは考えていたものの、しっかりとしたテーマを決めかねていた私は、カメラロールを見返しながら「これだ。」と思った。

2012 年、私がまだ辛うじて中学生だったころ、受験勉強の息抜きに、『神様はじめました』というアニメを観ていた。原作は『花とゆめ』という少女漫画雑誌に掲載されており、お金も身寄りも家もなくしてしまった女子高生の主人公・桃園奈々生が古の縁により廃神社の神様となり、神使の巴衛、鬼火童子の鬼切・虎徹と一緒に過ごしていくうちに、神として、人として成長していく物語である。この作品には、たくさんの神様や神使が、親しみやすい姿形で登場する。

そのことを思い出した私はレポートを書けるような気がした。動物好きが高じて無意識に神使と写真を撮っていて本当によかった。

私は神様と神使の関係に、日本特有の愛着のようなものを感じた。アニメのイメージを引き継いでかもしれないが、海外にはないものではなかろうか。

神にお仕えする動物が故、神の数だけ神使がいる。今回私が班員と実際に見て回った神社は、1 人の神(神は人型であることが多いだけで、人ではないが。)に 1 匹の神使。という神社ばかりであったが、そのような決まりがあるわけではなく、1 人の神に複数種類の神使というケースも稀ではないようだ。

見て回った中で一番有名なのはやはり伏見稲荷神社の狐だと思う。班員 3 人そろって、京都の観光客らしく、着物を着て境内を見て回った。出店で発見した狐のお面を、1200 円と少々お高めではあったものの、雰囲気づくりと思い出づくりのために大枚をはたいて買った。境内では様々な狐に出会えた。五穀豊穡の神社であることから稲を銜えた狐、鍵や巻物を銜えたものも見受けられた。

次に訪れたのは祇園、八坂神社だった。この神社の神使は牛のようだ。私の勝手なイメ

ージとしては小さくかわいらしい動物ばかりが神使のかと思っていたが、思い違いだったようだ。確かに眷属は強いに越したことはないだろう。丑年生まれの私としてはなんとなく親近感が湧いた。

少し小さな神社、護王神社の神使は猪で、地元の方々が足腰の健康を祈りに来る神社であった。境内にいた猪は、石像、絵馬のイラスト、どれを見ても「猪」というよりは「瓜坊」のイメージの強い、とてもかわいらしい猪だった。

個人的に一番印象に残った神使は、住吉神社の兎である。他の神社の神使の石像は、手の込んだ、ごつごつしたデザインという印象を受けたのに比べ、住吉神社の兎は丸みを帯びたかわいらしい見た目であると私は感じた。お守りのデザインもとてもかわいらしく、女の子受けが良さそうだなと思った。住吉神社の兎に出会ったことで、なるほど、神使はその神社のマスコットの役割を果たし、金銭面において直接的に神社を守る役割を果たしているのかと勉強になった。神社経営の策略が垣間見えた気がした。

最後に散歩がてら訪れた下鴨神社だが、ここの神使は鴨…かと思いきや鳥であった。神使は、その神社の神がかつて助けられた動物であったり、神社のある土地に古くから生息していた動物が採用されていたりと意外とふわとしたエピソードの中で成り立っているようだが、さすがに下鴨神社の神使なのだから。鴨だろうという憶測はあまりにも安直すぎたようだ。下鴨神社は美人の神様が祀られているらしかったので、念入りにお参りをした。そして「美人水」という名のカリンの実を使ったドリンクを飲んだ。効果が感じられる日が待ち遠しい。

以上いくつかの神社の神使を紹介したが、神社の境内にはあまり神使についての説明書きがないように感じた。そこに祀られている神様や、その神が何の神であるかという説明書きが大切であることはわかるが、もう少し神使にスポットを当ててみていいのではないかと思った。

私は今回の研修旅行で、神社の片隅でひっそりと参拝客を見守る神使の存在を、たまたまレポートの題材に思い悩んでいて、たまたま『神様はじめました』を観ていたがゆえに認識し、その動物たちについてほんの少しだけ考えることが出来た。すでに京都から帰って北海道にいるが、複数の神社を訪れて肌で感じた「古き良き日本」の空気のようなものを忘れてはいない。その記憶を胸に、きっと私は、これから神社にお参りに行く際には、神使という何とも健気で愛らしい動物たちの存在を背中で感じつつ、神頼みするに違いない。

今まで神社には初詣くらいでしか訪れたことがなかったが、ふと心を落ち着けたくなった時に訪れるというのもいいかもしれない。

伏見と酒、伏見の酒

2 部日本文化学科 2 年 2816103 伊藤 大樹

人は、お酒が好き。今も昔も、うれしい時、楽しい時には仲間と盃を交わし、悲しい時にはお酒に愚痴をきいてもらう。月が綺麗なら空を見て、桜が咲いたなら花見をし、どの場面にも何よりの友としてお酒が横にいた。今回、京都での研修をとおし、私は日本酒メーカーの最大手である月桂冠の大倉記念館を訪れ、月桂冠の日本酒がどのように製造されているのか、どのような歴史を経て今に至るのかを調査した。

日本酒の伝統的な製造方法。まず、お米の表面の糠などを取り除くためにお米を洗う。その後に踏桶と呼ばれる入れ物にお米を入れ、米洗唄を歌いながら素足で 70 回、50 回、30 回、と回数を分けて踏む。踏んだお米に掛け水をし、漬桶に入れて水に浸し、数時間後、栓を抜いて水を切る。

次は甗という蒸し器にお米を入れて一時間ほど蒸す。白米は、蒸すことによって発酵しやすくなる。ぶんじと呼ばれる木製のスコップで蒸米を取りだし、飯試に入れ、肩に担いで仕込み倉に運ばれる。熱い蒸米を筵という敷物にあげ、熊手で広げ、冬の早朝の冷気で適温にまで冷やす。麴にするお米は 32℃前後、醪用の蒸米は 5～10℃くらいにまで冷やす。次は麴づくり。麴室の床に麴菌の胞子を散布してお米を積む。約 40 時間かけて積み替えるなど手を加えて、麴が出来上がる。蒸米、麴、水をよくかきまぜ、へら櫛を使って蒸米をすり潰す。それを低温で発酵させ、純粋な酵母をつくる。醪用の大きな桶に酛酒づくりに適した酵母)を入れ、麴、蒸米、水を 3 回に分けて加える。その後、温度を調整しながら約 25 日間でお酒をつくる。できあがったら、醪を压榨、ろ過し、新酒と板粕に分け、ゆっくりと絞り、出来上がる。

このような製造方法でつくられる月桂冠の日本酒は、今でこそ全国に流通、広く親しまれているが、もとは伏見でづくり、伏見周辺でのみ販売していた。伏見の付近という小さなエリアにはたくさんの酒蔵がある。綺麗な水が湧くためである。伏見は昔「伏水」と書かれていたことからわかるように、非常に良質な地下水に恵まれた土地である。平安時代、伏見の氏神である御諸神社の境内に清水が湧きだし、朝廷が「御香宮」という称号を贈ったほどである。硬度が低く、軟水でつくられるためまろやかな味のお酒ができる。そのため伏見のお酒は「女酒」と呼ばれる（対して「男酒と呼ばれるのは硬水でつくられる灘のお酒）。北に比叡山、西に愛宕山、そして東山三十六峰と、三方を山に囲まれている京都盆地。「京の底冷え」といわれる盆地特有の厳しい風土の中で、京の南の玄関口にあたる伏見は、淀川、桂川、加茂川を結ぶ港町として、また参勤交代制度における滞在地として繁栄した。そして、JR が開通する。JR の駅で、月桂冠のお猪口付きボトルが販売され、好評

を博したのを皮切りに全国的に展開していくこととなる。

月桂冠大倉記念館では、利き酒を体験させてもらえる。50年前の味を再現したお酒、現代風のお酒の味を比べさせてもらえるのだ。昔の方は比較的甘口で、現代の方は辛口だった。職員さんのお話によると、昔は今よりもお酒そのものをたのしむ傾向にあったそうだ。そのため、おつまみがなくてもお酒だけで飲めるよう、甘口でつくってあるそうである。現代では、脂っこいものなど、食事と共に飲まれることが多くなったため、それに合わせて辛口になっていったそう。ここで、お酒に深く関わっている職員さんがどんな食べ物でお酒をたのしんでいるのか気になったため、インタビューしてみた。一人目の職員さんに訊くと、「月並みですが」のコメントの後に、焼き鳥です、と答えてくれた。なるほど確かに。焼きたてのこうばしい香り。皮はパリパリなのに、その先にいる肉はふわふわ。噛んだ瞬間に広がる肉汁のなんとジューシーなこと。そうなれば、体が酒を求めるのは必然。すぐさま喉に流し込む。柔らかな熱が体の内を下っていくのが分かる。夢の中のようで目の覚めるような感覚。

想像しただけでたまらん。京都には美味しい焼き鳥屋さんが多くあるので、単に焼き鳥といえども、京都に住んでいるが故の答えと言えるかもしれない。滴るよだれを必死に飲み込みながら礼を言い、渴いた喉で次の職員さんに同じ質問を投げかける。「年をとると脂っこいものがたべられなくなりまして」と前置きした後に、湯豆腐、と答えてくれた。湯豆腐。その響きが舌に広がる。熱々なその美しい白を口の中でほぐす。はふ、はふ、と、口のなかに余る熱を少しずつ外に逃がす。そこでようやく気付く、そのなめらかさ。力はいらない。先ほどまで綺麗に整っていたその形は、舌の上で踊るように、軽やかにほぐれていく。無意識のうちに、お猪口へと手がのびる。運ばれてきた清らかな酒が、喉で白と出会う。鋭く、けれど温かく、喉のその先へと落ちていく。それが想像だと気づいた時には、足が既に湯豆腐を出してくれるお店に向かおうとしていた。伏見のお酒が綺麗な水でできているように、京都のお豆腐も清らかな水でできている。故に雑味がなく、繊細。この両者、相性が悪いわけがない。職員さんにお礼を言い記念館を出た。手も足も、頭も、すべて描いた幸福を現実のものにせんと働いていた……。

以上のとおり、私は京都、伏見のお酒がどのようにつくられ、どのような歴史を持っているのかを調査した。そのなかで、京都の風土や歴史的背景に、ほんのわずかではあるが触れることができた。そしてなにより、甘美なる体験をすることができた。私がお酒を飲めるようになって日は浅いが、これからの人生で長く付き合っていくであろう友の、新しい一面を伺えたことは、何物にも代えがたい経験であろう。全国各地、私のまだ見ぬ友がいると考えると生きる希望がわいてくる。これを読んでいる皆様、京都を訪れる際は、是非伏見に行き、美味しいお酒を飲み、美味しい食べ物を食べてほしい。ただし、お酒をレポートのテーマにするのは少々考えものである。何故か。帰ってきて目が覚めたとき、調べた内容がすっかり頭から抜けているからである。

人に力を与える都

2 部日本文化学科 2 年 2816122 田中 尊理

古来から世界中で飢饉や天災により生活に困った際に神様に手を合わせたり縋ったりしてきた。特に日本では様々なものに神が宿っているというアニミズム思想がされており、いろいろなものを神として崇め奉ってきた。鹿島則良（2014）は「神道における「神」は絶対神ではなく、八百万の神といわれるように、さまざまな神様がおられます。全国に八万社とも言われる神社がありますが、祭られている神様もさまざまです。そしてそれぞれの神社が鎮守様とか氏神様として長い歴史の中で地域の人たちを守り、地域の人たちの心の拠り所として大切にされ、今日に至っております。」と述べていたり、西山滝蔵（1981）が「神を崇め天を敬うことは人間の美德である。神を信じて善を行い悪を憎む人を作ることが教育である。」と述べている。このように昔から日本には様々なものに神が宿っているアニミズム思想があり、それは今現在でもなお残っている。古都京都には神や仏の恩恵を受けられる寺や神社、いわゆるパワースポットがたくさんある。今回京都には日本人だけでなく、世界中の人々が集って多くの寺社をめぐり、昔から多くの人々に頼りにされてきたパワースポットはなぜ今なお人気があるのかを、神が宿る石や水、木などを自分自身で触ったり見学したりしてどのようなご利益があるのか身をもって体験してみたいと考えた。そこで今回の京都研修で私は晴明神社、護王神社、伏見稲荷大社、野々宮神社、錦神社、蛸薬師堂、八坂神社、下鴨神社、河合神社、清水寺、安井金毘羅宮などの神社や寺を回った。その中でも私が個人的に印象に残った寺社について述べたいと思う。

まず私の中で印象に残ったのは平壤オリンピックで金メダルを獲得した羽生結弦選手の影響でさらに人気を増しているパワースポットの晴明神社である。古代ではエネルギーを運ぶとされる「気」を重んじていたとされている。この晴明神社には平安時代の陰陽師である安倍晴明が祀られており、陰陽道であることからパワースポットとして知られている。この神社には陰陽五行説の象徴である五芒星の紋が至る所にみられる。五芒星は魔除けの呪符として重宝されているようだ。境内には樹齢推定三百年の御神木である「楠」や、古来陰陽道では魔除け厄除けの果実とされている桃の銅像「厄除け桃」、千利休終焉の地で太閤秀吉に振舞ったり、最期に自服した茶もここから汲んだ聖水で点てたものであるとされている「晴明井」がある。境内に入ると一気に雰囲気が変わった感じがした。他の場所と比べ空気が澄んでいるように感じられ、神聖な感覚になった。樹皮に触れると独特の感覚があるとされている「楠」や、厄年に限らず厄を桃に撫でつけることができるという「厄除け桃」を実際に触ってみた。「楠」は普通の木の樹皮のようだなと感じ、「厄除け桃」もただの桃の形をした銅像のように感じ、本当にご利益があるかどうかはわからなかった。「晴明井」から湧いている聖水を飲んでみたところ、柔らかくて飲みやすい水でありおいしいと感じた。ご利益はこの水でも感じられなかった。しかし、この「晴明井」の前には、

信仰対象の水であるため一回の持ち帰りは五百ミリリットルを限度とする旨を伝える立札があった。このような立札から持ち帰って飲んだり、お供えする水に使ったりされている人々に愛されている水であることが分かった。

次に印象に残ったのは蛸薬師堂である。正しくは浄瑠璃山永福寺といい、その名の通り蛸が祀られている。ここの御神水で体や家を清めたり、「なで蛸」という木でできた蛸を撫でると病を治すご利益があるとされている。ここでは「なで蛸」を撫でてきた。私はこの京都研修中初日から風邪をひいており、どんどん悪化していた。しかし、蛸薬師堂に参拝しに行った翌日から風邪が徐々に治ってきているように感じられたのでご利益があったのだなあと感じることができた。

次に印象に残ったのは縁切り縁結びで有名な安井金毘羅宮である。ここでは「縁切り縁結び石」という大きな石があり、そこに形代という自分の身代わりになるお札を持ち、願いごとを念じながら石の中心にある穴をくぐる。そして最後に石に形代を貼ると願いが叶うと言われている。この石はとても人気があり、願いをかなえるために石の前に行列ができることもあるという。縁結びで有名な神社などはよく見かけるが、悪い縁を切るという神社はあまり見かけないので強く印象に残った。また、石には人々が貼っていった形代がこれでもかというくらい大量に貼られており、石が直接見えないほどであった。またほかの神社の絵馬には名前がイニシャルで書かれていたり、名前が記されていないものも多く見受けられたが、この神社にかけられている絵馬には願う人の名前も願われる人の名前も実名と思われる、しかもフルネームで記されているものが大変多かった。それによってこの神社を訪れる人々はどれだけ人との縁を切り、人との縁を結びたいのかがほかの神社に訪れる人々よりも執念深いのだなと感じることができた。

これらの神社や寺を参拝し、神や仏の恩恵を受けられるという御神木や御神水、霊石を実際に触ったり見学したりした。自分自身でご利益を感じることができたり、神聖な空気を感じることができた。ご利益を感じることができるかどうかは神や仏を信じ拝むことではなくその人の気持ち次第であり、またそのご利益の程度もその人次第で変わってくると私は考える。しかしそれでも今なお京都に世界中の人々が足を運び、いろいろな寺社を回る人々が減らないのは、人々が日常の中に常に目に見えない不安やストレスを抱えて日々生活していて、自分ひとりの力ではどうしようもないことを神や仏の超常現象ともいえる力を拝借してでもどうにかしたいという、人間の何かにすがりたいという気持ちを現代でも多くの人々が持っているということが分かった。この先、自分の力ではどうしようもできない局面に達したときにもう一度京都に力を与えてもらうために訪れたい。

参考文献

鹿島則良「JAPAN・神とともに歩んできた国」 武道学研究、46 巻 3 号、2014 年。

西山淹蔵『敬神と武士道について』 武道学研究、1981 年、13 巻 2 号。

京都観光ナビ http://kanko.city.kyoto.lg.jp/feature/kyo_powerspot_11.php

安井金毘羅宮ホームページ <http://www.yasui-konpiragu.or.jp/>

京都人の人となり

2 部日本文化学科 3 年 2815135 畑内 京介

今回の日本文化特別演習に赴くにあたって、私は京都を訪れた事のある方数名に事前にお話を伺った。内容は、テーマにもある通り京都に住む方々の人となりである。

当初の予想に反し、京都を訪れた方々が口々にしたのは、「京都人は冷たい」だった。

それに疑問を覚えた私は、今回の特別演習を良い機会と捉え、本当に「京都人は冷たい」のかを分析してみた。

方法としては、あまり良いサンプルとはいえないかもしれないが、他に方法を思いつかなかったため、京都に住む方々に直接お話を伺うという方法を取った。

一口に京都に住む方々といっても、様々な人達がいるが、今回は、観光地に務める方、都市部で暮らす生粋の京都人、他県から移住してきた方、の三種類の方々にお話を伺ってきた。

まずは、「ろぐ」という焼き鳥居酒屋を営むマスターのお話を紹介したいと思う。

マスターは京都で生まれ育った生粋の京都人だそう。なるほど、たしかに言葉の端々に我々道民は聞き慣れない「方言」があった。「～やっというてや」「～言わすな」などといった語尾が非常に特徴的だった。少々強面であるという事も相まって、事前情報通り、失礼ながら冷たい、あるいは少々高圧的な印象を受けてしまった。しかし、客と店主という関係でお酒を間に挟みながら会話を進めていくと、先程の第一印象はどこかへ消え去り、マスターは子供好きな気さくな方だという事がわかった。

一度印象が変わってしまうと、最初は冷たい、高圧的な印象を覚えた「方言」も気にならなくなった。

翌日、更に詳しくお話を聞こうと、再び「ろぐ」を訪れると、Aさんという常連の方がカウンタに座っていた。話しかけると、Aさんは数年前に大阪から京都に仕事の関係で移住してきた方だという事がわかった。

これ幸いにと、Aさんに引っ越してきた当初京都人は冷たいと感じましたか？ と聞いてみた。すると、やはり第一印象はそれに類する感情を覚えたと言った。

お酒の席という事もあり、マスターを交え三人で談笑しながら議論してみると、興味深い話が出てきた。Aさんが言うには、何か仕事を教える時に普通であればこれこれこういう風にやっというてね、と言う所を京都の方はこれやっというて、で済ます傾向にあると言った。

最初はそんなまさかと話していたが、話が煮詰まってくると、ある一つの可能性が出てきた。京都独自の感性とでも呼べるものだろうか、「はんなり」の精神である。

「はんなり」とは、簡単にいうと明るく柔らかく、それでいて優しく華がある、という現代日本人から失われつつある、なんとも古式ゆかしい日本人めいた精神の事だ。

京都という地は、その歴史の関係から今もそうした事を重視している家庭が少なからず存在するようだ。そうすると、「はんなり」の精神は多かれ少なかれ周囲の人間に影響を与えるであろう事は想像に難くない。

そこで問題になってくるのが、「はんなり」の精神のやっかいな所である。「はんなり」は外から見ると分には非常に美しく見えるのだが、いざそれが自分に向けられると、どこか余所余所しいと感じてしまうらしい。というのも、あまり多くを語ってしまうと美しさから離れてしまうらしく、言葉少なに想像の余地を残す事が美しさや奥ゆかしさといったものに繋がるようだ。現代的な感覚しか持ち得ていない自分には理解出来ない感覚だったが、マスターとAさんはそうした傾向が少なからずあるとおっしゃった。

ここで一つわかったのは、冷たさを感じる要因の一つに方言の「語尾」と「言葉足らず」がある、という事である。

上記を踏まえて、次に観光地に務める方にお話を伺ってきた。

お忙しい所わざわざ時間を割いてくださったBさん曰く、都市部の人の事はわからないが、観光地の場合は、一日に何人も相手にするから自然と言葉が少なくなってしまうと、という事だった。

これはまさに上記に書き記した冷たさを感じる要因の一つの「言葉足らず」に当てはまる。

そこまで話を聞いて、しかし、と思った。主観的な感想になってしまうが、自分は今Bさんに対して冷たさといったものを感じていない。なぜだろうか、と考えた。

答えはすぐに出た。それは、Bさんが一観光客ではなく、私を私として見てお話をしてくださっているからだ。そこには私に向けた笑顔があり、なんらかの感情があった。

この場において「方言」や「言葉足らず」などといった冷たさを感じる要因は要因足り得ていなかった。

サンプルは少ないが、今回の件からわかった事は、間違いなく京都の人全般が冷たいというのはデマ、あるいはその人の感じ方に過ぎないという事である。もちろん、何事にも例外は存在するが、この問題に関しては、そうであるとは言い切れない。

京都の人は冷たいなどという事が言われるようになったのは、一重に「方言」特に「語尾」と、京都という独自の伝統が残る地域の「言葉足らず」が生んでしまった悲劇といえるだろう。

実際にフェイス・トゥ・フェイスで話してみると、彼らの多くは優しく親切だった。

主観的な問題のため、難しいかもしれないが、京都の人は冷たいというレッテルを貼るのはやめて、その人個人を見るのが大事なのだとわかった旅だった。そういった意味で、今回の特別演習は何物にも代えがたい貴重な体験と、自分なりの意識、見識を深める事の出来た非常に有意義な時間を過ごすことが出来た。

この場を借りて、京都で出会った全ての人に感謝を。

平成29年度 日本文化特別演習報告書 第7号

発行日 平成30年3月20日

発 行 北海学園大学人文学部

印 刷 株式会社アイワード

